

東日本大震災

踏み出そう!

子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

～震災から5年を経て～



国立大学法人
宮城教育大学

教育復興支援センター



東日本大震災

踏み出そう!

子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

震災から5年を経て



明日に向かって

教育復興支援センターの成果を生かして



国立大学法人宮城教育大学長

見上 一幸

東日本大震災から早くも5年が過ぎようとしています。あらためて震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族や被災された方々の一刻も早い生活基盤の復興、心の傷の快復を願っております。

被災地の現状をみたと、この5年の間に堤防、道路、そして新しい建物と工事が進み、見た目には着実に復興が進んでいるようですが、心の傷は癒えないままに、笑顔の陰には辛い記憶を心の奥に仕舞い込んでいる人も多いと思われます。今なお仮設住宅で不便な暮らしを余儀なくされている方も多く、震災後の住民の流失もなかなか歯止めが効かないのが現状です。

教育の現場では、宮城県だけでもまだ3千人に近い児童生徒が仮設住宅から通学し、24校の学校の敷地内に仮設住宅があり、県全体でのスクールカウンセラーの相談件数も上昇傾向にあるとも聞いております。子どもたちにも学力の低下、運動不足に加え、精神的な問題を抱える子どもたちが急増し、今まで気づかなかった心の傷が、年月が経つにつれ、顕在化してきています。津波被害に加えて放射能被害のあった福島の場合は、さらに計り知れない苦悩と不安があるものと思われます。

国は、このような被災地をも含め全国に一億総活躍社会の実現を目指し、地方創生に向けて一挙に加速しています。人口減少、消滅市町村、超高齢化、地域格差の拡大など、様々な課題に対して新たな施策を一つひとつと打ち出していますが、被災地に住む私たちは自分たちの経験を通して、復興への取組がとりもなおさず様々な課題の解決につながることを、強く訴えていく必要があります。

本学は被災地にある唯一の教員養成大学として、東日本大震災発災直後から、被災地への支援にいち早く取り組み

ました。発災3週間を経て、学内災害対策に一定の方針が定められたのを機に、学校支援のための組織「みやぎ・仙台未来づくりプロジェクト」を発足。県内の地震・津波被害を受けたすべての幼稚園、小中学校および特別支援学校の被災状況、支援ニーズの調査のほか、国内外から集まる救援物資・文具の中継ぎや人的資源の提供などを行ってきました。

2011年6月、宮城県の教育復興に向けて、中・長期的な視点に立って児童・生徒の心のケアや学力の向上に取り組む拠点として、「教育復興支援センター」を設立しました。本センターでは、スタッフの努力でさまざまな成果が生まれました。「未来の教師」となる学生による学習支援ボランティア活動は、本センターの活動の中核をなすものです。全国の教員養成系大学からの派遣協力も合わせ、この間に延べ5000名が被災地の教育現場で子どもたちと向き合ってくれました。このボランティア活動は、学生自身にとっても自己研鑽・成長の場となりました。本学のボランティア派遣に協力していただいた他大学の学長は異口同音に、ボランティア活動を経験すると学生がひと回り大きくなるという印象を受けると言っておられます。

事業は2年前から先んじて実施して来ましたが、2013年6月、「教育復興支援センター」棟が完成し、学生たちの活動拠点、研究拠点施設として稼働を始めました。

同じ2013年度には、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)の助成を受けて、地域の教育力、教育資源を活用した教員養成、育成を目指して「宮城協働モデルによる次世代教師教育プロジェクト」をスタートさせました。

また、同じく文部科学省の「学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業」を受託し、地域協働を基盤とした被災地への支援事業を数多く実施してきました。

2015年3月には、仙台市で「第3回国連防災世界会議」

が開催され、世界各国の首脳、閣僚級が参加し、国際社会における防災、減災活動の基本指針が検討されました。平成17年に神戸で採択された「兵庫行動枠組(HFA)」の検証を行い、後継として「仙台防災枠組」が採択され、世界へ向けて発信されました。

近年は、地震だけでなく、大雨に伴う洪水や各地での火山活動の活発化など、社会の持続可能性に不安を覚える自然災害の増加が危惧されています。2015年12月のパリでの気候変動枠組条約第21回締約国会議(COP21)と京都議定書第11回締約国会議(CMP11)で、「パリ協定」を含むCOP決定が採択されましたが、「仙台防災枠組」への言及が含まれていたことも、仙台市民としては喜ばしいことでした。

教育復興支援センターの成果の一つは、地方教育委員会や校長会と連携しての震災時の学校の記録の収集です。センターのスタッフにより、すでに何冊もの報告書としてまとめられました。これらは今後の防災教育、減災教育にたいへん重要な記録として、今後さまざまなところで活用されるものと思います。

その他、日本国内の防災教育の大学間の、また、世界の震災被災地との間のネットワークを構築し、グローバルな防災教育活動も行っています。このように、教育復興支援センターでは、設立当初に目指した目標にとどまらず、被災地の復興状況や社会の変化に対応しながら様々な取組を行ってきました。

本学は、2013年のミッションの再定義により教員養成における広域拠点型大学と位置付けられました。本年度、開学50周年を迎えた本学にとりまして、教員養成教育に責任を負う大学として、教員養成教育と現職教育とを両輪とした地域に密着した教育の実施、広い視野や高度な専門性、実践的指導力を具えた教員の養成、東北地区の教員養成をリードする大学でありたいと、新たな価値の創出に力を尽くして参りました。

「教師を志す学生に卒業はなく、教師は主体的に考え、生涯学び続ける存在である」という本学の伝統に立脚し、「イノベティブティーチャー(生涯学び続ける教師)」の育成を目標に掲げ日夜努力を重ねております。

昨年12月には、これからの教育が目指すべき重要な答申が中央教育審議会より示されました。一つが「これからの学校教育を担う教員の資質向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」で、別の一つが「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた～学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について～」です。

一つ目は、教員養成や免許制度、教員の資質向上について明確な方針を示しており、教員養成大学である本学が本務として取組むべき内容です。昨今の教育現場の置かれた状況に鑑み、複雑・高度化する社会情勢の中にあって、未来を担う子どもたちを育成する教師のあるべき姿を示しています。本学が進むべき大学改革への一つの指針を与えてく



れているとも言えます。

二つ目は、永年の課題でもありました学校と地域のつながりを深め、社会総ぐるみの教育を実現しようというものです。コミュニティスクールの推進や学校支援地域本部の充実を通して、地域と学校の協働を進めるねらいがあります。新しい学習指導要領の中心概念となる「社会に開かれた教育課程」に象徴される動きと言えます。

本学が、平成25年度から3年間にわたって取り組んできた「学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業」は全く同じねらいをもっておりました。この事業への取組を通して、教員養成という本来の役割に加え、地域社会を支える市民を育てるという新たな役割を認識しましたが、本学にとっては、結果的には時代の要請を先取りした画期的な取組になりました。

私たちにとって東日本大震災は、悲しく、辛い出来事でしたが、負の経験で終わらせることなく、子どもたちに未来へつながる希望を与えるために、多くの活動を行ってきました。それが、教育を担う教員養成に責任を持つ本学の使命と考えたからです。

5年間の活動を終えるとき、これまで積み重ねてきた実績を活かし、次につなげる展開を考えなければなりません。全国的に見れば、残念ながら復興への意識も薄れ、記憶の風化も進んでいるのが現実です。

このようなときにこそ経験を語り継ぎ、研究で得た知見を提供し、次に起きるであろう自然災害に備え、一人でも多くの命を救えるように働きかけることが、私たち教員養成に関わる者の、そして被災地に住む者の役割であると考えます。

被災地の現状をみたと、復興への努力はまだまだ続けなければなりません。当センターは、復興の第1ステージである5年間という期間を全うし、その役目を終えますが、本学では次の復興第2ステージとして新たなセンターを設立し、防災・減災教育の拠点とし、21世紀型の資質向上も含む未来指向型の教育実践研究を目指すこととしております。被災地にある唯一の教員養成大学として、東北6県の各大学や地方自治体と連携しながら、次代を担う人材育成に邁進する覚悟です。

目次

踏み出そう！子どもたちの笑顔のために
あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

東日本大震災

明日に向かって

教育復興支援センターの成果を生かして 国立大学法人宮城教育大学長 見上 一幸

I 教育復興支援センター5年間の歩み	01
II 支援実践部門	03
1 教育復興支援塾事業	04
2 教員補助事業	08
3 教員研修等事業	12
4 子ども対象・参加イベント事業	14
5 心のケア支援事業	15
6 ころごし・キャリア教育事業	16
資料「学生が学習支援ボランティアに関わった津波被災校6年間の児童生徒数の推移」	17
III 研究開発部門	19
1 震災復興・防災に関する調査・研究成果の学術発表	20
2 共同研究	21
3 グローバルな連携の構築・海外発信	22
4 復興カフェ in Miyakyo	24
5 紀要	24
6 その他——研究開発部門における学校連携等	25
IV 人材育成	27
1 ボランティア協力員の活動	28
2 国連防災世界会議（学生企画）	31

V 新たな教育の創造に取り組んで	33
1 第3回国連防災世界会議への参画	34
2 教育大学防災ネットワーク (NUE)	36
3 学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業	37
4 探究の対話 (p4c: philosophy for children)	42
VI 資料編	44
1 教育復興支援センターだより (平成27年度)	44
2 刊行物	47
3 外部資金等	50
4 平成27年度教育復興支援センター活動 (事業) 実績一覧	53

「これまで」そして「これから」

5年間の活動を振り返って 教育復興支援センター長 中井 滋





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

I

教育復興支援センター5年間の歩み

I 教育復興支援センター5年間の歩み

平成23年	3月 11日	東日本大震災発生
平成23年度	6月 4日	未来づくりESDセミナー「震災復興と学校・地域の未来づくり」
	6月28日	国立大学法人宮城教育大学教育復興支援センター設立
	7月～9月	県内各市町村での学習支援ボランティア活動 ＜松島町、七ヶ浜町、名取市、女川町、大崎市、相馬市、気仙沼市、石巻市、南三陸町等＞
	10月29日	不登校支援と震災後の心の支援セミナー
	12月20日	「宮城教育大学教育復興支援センター構想」が 文科省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」に選定
	12月～1月	県内各市町村での学習支援ボランティア活動 ＜栗原市、大崎市、岩沼市、大和町、柴田町、大郷町、気仙沼市、石巻市、南三陸町等＞
平成24年	1月13日～15日	スチューデント・リビルド 折り鶴プロジェクト～にじいろぱれっと・ありがとうをかたちに～へ参加
	2月 11日	「学校・地域連携研究シンポジウム」開催～夢と志をもつ子どもたちを育むために～
	3月 4日	特別支援教育フォーラム「東日本大震災と特別支援教育」
	2月～3月	県内各市町村での教育復興支援活動 ＜南三陸町、気仙沼市、亶理町、丸森町、松島町、七ヶ浜町、大崎市、岩沼市等＞
	3月17日	教育復興支援ボランティア総会
平成24年度	4月～通年	学校における教員補助活動(仙台市、岩沼、名取、亶理、登米・気仙沼・南三陸での仮設住宅)
	6月20日	「教育復興支援センターだより」創刊号発行
	6月28日	ランチ(仙台中央事務所・気仙沼事務所・仙南事務所)開所式
	7月～9月	県内各市町村での学習支援ボランティア活動 ＜塩釜市、大和町、柴田町、亶理町、南三陸町、色麻町、登米市、角田市、美里町、栗原市等＞
	9月16日	石巻市仮設住宅にて民族舞踊講演
	9月26日	東日本大震災被災地視察研修(石巻市大川小学校他)
	10月17日	韓国大邱教育大学被災地視察(仙台市立荒浜小学校他)
	10月20日 21日	大学祭【活動紹介&意見交換会】
	11月 3日・4日	全国生涯学習ネットワークフォーラム2012開催(本学にて)
	12月19日	学生主催ボランティア報告会「震災復興・宮教生にできること」
平成25年	1月16日	講習会「iPad 活用」
	2月～3月	県内各市町村での教育復興支援活動 ＜南三陸町、気仙沼市、亶理町、丸森町、松島町、七ヶ浜町、大崎市、岩沼市等＞
	2月18日	復興カフェin Miyakyo「気仙沼市仮設商店街の状況」
	3月11日	復興カフェin Miyakyo「教育復興支援センターの役割と課題」
平成25年度	4月24日	ボランティア総会
	4月～通年	学校における教員補助活動(仙台市、岩沼市)
	5月29日	ボランティア講習会「ボランティア新聞をつくろう」
	6月14日・15日	東日本大震災被災地視察研修(南三陸町・戸倉小学校他)
	6月26日	拡大復興カフェin Miyakyo「震災を忘れないために」
	6月29日	教育復興支援センター棟 オープニング記念シンポジウム「学びの力が未来を拓く」
	7月～9月	県内各市町村での学習支援ボランティア活動 ＜塩釜市、大和町、柴田町、亶理町、南三陸町、色麻町、登米市、角田市、美里町、栗原市等＞
	9月27日～29日	沖縄県立芸術大学被災地訪問＜女川、石巻、荒浜地区＞
	10月14日	学生企画による被災地視察研修(気仙沼向洋高校他)
	10月26日・27日	大学祭企画ボランティア報告会&フォーラム
	10月31日	復興カフェin Miyakyo「台風26号による伊豆大島の災害と支援」
	11月 5日	大学広報誌「あおばわかば」に本センターの特集掲載
	11月20日	復興カフェin Miyakyo 「フィリピン台風30号ー私たちにできる恩返しを考えたいー」
12月 7日	学生企画による被災地視察研修(南相馬)	



I 教育復興支援センター5年間の歩み

平成26年	平成25年度	1月21日～25日	「AERで学ぼう～宮教大防災Week～」		
		2月～3月	県内各市町村での教育復興支援活動 ＜南三陸町、気仙沼市、亶理町、丸森町、松島町、七ヶ浜町、大崎市、岩沼市等＞		
		2月 11日	高校生講座「考えよう!しごと・復興・私の未来」		
		3月 1日	復興フォーラム「震災から3年～これからの子どもたちの元気を支援するために～」		
		3月 9日	活動情報教育復興フォーラム 「考えよう、子どもたちの未来を拓く学校と地域の再生支援」		
平成26年	平成26年度	4月23日	学生協力員総会		
		4月～通年	学校における教員補助活動 (仙台市、岩沼、名取、亶理、登米・気仙沼・南三陸での仮設住宅)		
		6月 11日	復興カフェin Miyakyo(ダイアンフカミ監督ドキュメント上映会)		
		7月 16日	夏休みボランティア不安解消会		
		7月～9月	県内各市町村での学習支援ボランティア活動 ＜塩釜市、大和町、柴田町、亶理町、南三陸町、色麻町、登米市、角田市、美里町、栗原市等＞		
		8月23日	関東圏同窓会ネットワーク総会「防災教育シンポジウム」(新宿)		
		9月19日～21日	「AERで学ぼう～宮教大防災3Days～」		
		10月31日 ～11月 2日	JICA被災地研修(陸前高田市等)		
		11月26日	東松島市講演会「東日本大震災が教えてくれたこと」		
		平成27年	平成27年度	1月 21日	学生協力員総会
				2月～3月	県内各市町村での教育復興支援活動 ＜南三陸町、気仙沼市、亶理町、丸森町、松島町、七ヶ浜町、大崎市、岩沼市等＞
2月 4日	復興カフェin Miyakyo「中野小・荒浜小のボランティア活動」				
3月 14日 ～18日	第3回国連防災世界会議(仙台市にて開催) ＜総合フォーラム、RCEシンポジウム、ブース展示、エキスカージョン＞				
4月23日	学生協力員総会				
平成27年	平成27年度	4月～通年	学校における教員補助活動 (仙台市、岩沼、名取、亶理、登米・気仙沼・南三陸での仮設住宅)		
		7月～9月	県内各市町村での学習支援ボランティア活動 ＜塩釜市、大和町、柴田町、亶理町、南三陸町、色麻町、登米市、角田市、美里町、栗原市等＞		
		7月27日	蔵王町教職員研修会～志教育と学力向上について～		
		7月28日	大崎市研修会「ハザードマップの作り方」「防災教育の必要性」		
		8月 11日	田端健人教授/ こころの復興フォーラム(東京エレクトロンホール宮城)		
		8月24日	復興カフェin Miyakyo「愛知教育大学学生との懇談」		
		9月 4日	仙台市小学校長会研究協議会 ～世界が注目する仙台の防災実践、国連防災戦略「仙台防災枠組み2015-2030」採択地として～		
		9月12日～13日	「AERで学ぼう～宮教大防災WeekEnd～」		
		10月18日	p4c国際フォーラムin仙台		
		10月28日	復興カフェin Miyakyo「防サイエンスショー・楽しく科学・伝える防災」		
		10月30日	大崎市防災教育講演会		
		12月17日	キャリア教育研修会「キャリア教育の底力」寺岡小学校		
		平成28年	平成28年度	1月23日	総括フォーラム
2月～3月	県内各市町村での教育復興支援活動 ＜南三陸町、気仙沼市、亶理町、丸森町、松島町、七ヶ浜町、大崎市、岩沼市等＞				
3月9日～14日	東日本大震災メモリアルイベント(被災地視察研修・メモリアルフォーラム等)				
3月31日	教育復興支援センター閉所 (新センターへ引き継ぎ)				



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

II

支援実践部門

教育復興支援センターは、東日本大震災後、被災した宮城県内の学校教育の復旧・復興、具体的には児童生徒の確かな学力の定着・向上、現職教員の各種支援等を目的に設置された。センター開設にあたり、支援実践部門における取組の具現化にあっては、以下の2点が大きな参考となった。

一つは、震災直後の学生有志によるボランティア活動である。震災は春休み中の出来事であり、帰省した学生も多く、また交通事情もあって大学にいる学生は少なかった。一方、大学に支援を求める被災地や学校もあり、また全国の教員養成系大学を中心とする国立大学からからの物的支援もあったことから、部活動で活動する運動部員や大学構内の寮生の協力を得て、さまざまな活動に取り組んだ。震災直後は、瓦礫撤去、家具等の移動、清掃、避難所の給水、炊き出し、支援物資の仕分けなど多岐にわたった。その後、復旧が進むにつれて、本学への支援要請は刻々と変化しそのニーズに対応してきたが、次第に教育大学の特性を生かし、学習支援（教員補助、T1・T2）、補習授業の指導、自学自習への支援、避難所の子どもたちの遊び相手、読み聞かせなどに落ち着いてきた。例えば、石巻支援学校へは震災直後、本学特別支援専攻の学生が中心となり、3人1組、2泊3日の日程で避難所の運営補助として、清掃、炊飯、児童生徒との遊びや介助等にあたってきた。その縁で現在も、年2回運動会と学校祭にボランティア学生を派遣している。

二つは、平成20年6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震、それへの対応である。最大震度6強、マグニチュード7.2、死者17人という被災の規模は、東日本大震災の被災に比べると大きくはなかったが、震源地の栗原市にとっては土砂崩れなど大きな被害があり、特に学校生活や授業時間の確保等に大きな影響が出た。このことを契機に、栗原市、同教育委員会と宮城教育大学とで連携協定が結ばれ、教員研修、学生による児童生徒の学習指導等を行うことになった。それが今日の「学府くりはら塾」の嚆矢である。この経験が東日本大震災後の各市町村、教育委員会との連携、教育復興支援、教員補助事業を推進する上で参考になった。

最後に、章末に掲載した「学生が学習支援ボランティアに関わった津波被災校6年間の児童生徒数の推移」について触れておきたい。

東日本大震災の被災地は、太平洋沿岸地域である。元々過疎地であり震災以前から学校の統廃合が議論されてきた。それが津波による被災で校舎が使用不可能となったり、そこに通学する児童生徒の生活の基盤、交通手段が失われ、統合が進み、女川町のように一小学校、一中学校となったところまでである。

例として、南三陸町立戸倉小学校、戸倉中学校について取り上げると、両校とも震災後の津波により校舎は使用できなくなり、仮設校舎での生活を経て南三陸町立志津川小、中学校校舎で過ごすという経験を味わっている。そして平成27年4月、戸倉中学校は志津川中学校と統合する。一方、戸倉小学校は、平成27年10月より戸倉地区の高台に完成した新しい校舎に引っ越し、新生戸倉小学校としてスタートを切った。児童数の減少、通学上の困難は以前と同様であるが、あえて志津川小学校との統合は回避した。

これは、地域にとって学校は文化の象徴であり、住民の心の拠り所であり、災害時には避難所ともなる、と町民、町議会が認めたためである。このケースは稀な例と思われるが、そこに秘められた思いは熱く、今後一つの指針となるであろう。

1 教育復興支援塾事業

長期休業期間や土日を利用し、支援地域に学生を派遣して学力格差解消のための補習事業を実施しています。

日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)		派遣延人数 (他大学内数)		協力・連携大学
7/30～7/31	大和町立宮床中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	2		4		
8/3～8/7	名取市立関上中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	12	(5)	40	(25)	愛知教育大学
8/3～8/7	登米市立南方中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	14	(11)	65	(55)	京都教育大学 大阪教育大学
8/3～8/7	大河原町立金ヶ瀬中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	1		4		
8/3～8/7	大河原町立大河原中学校①	自学自習支援(中1～3年生対象)	2		7		
8/3～8/7	岩沼市内小中学校①	自学自習支援	7		19		
8/3～8/7	大崎市立古川中学校	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	2		5		
8/4～8/7	丸森町立丸森中学校	自学自習支援(5教科:中1～3年生対象)	5	(2)	17	(8)	奈良教育大学
8/4～8/7	亶理町内小中学校①	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	3		9		
8/16～8/20	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科、教材作成・指導を含む)	16		60		
8/17～8/21	大河原町立大河原中学校②	自学自習支援(中1～3年生対象)	1		4		
8/17～8/21	色麻学園	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	2		8		
8/17～8/21	大崎市立鹿島台中学校	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	1		4		
8/17～8/21	富谷町立富谷中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	7	(1)	24	(2)	東北学院大学
8/17～8/21	大郷町立大郷小・中学校	サマースクール講師・自学自習支援	9		23		
8/17～8/21	塩釜市内2中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	4		17		
8/18～8/19	仙台市立蒲町中学校	自学自習支援(5教科:中1～3年生対象)	2		3		
8/18～8/20	角田市内小学校①	自学自習支援	1		2		
8/18～8/20	亶理町内小中学校②	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	3		8		
8/18～8/21	岩沼市内小中学校②	自学自習支援	1		4		
8/18～8/21	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	15	(9)	58	(35)	福岡教育大学 早稲田大学
8/20～8/21	女川地区小・中学校および仮設住宅	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	7		14		
8/20～22	栗原市文化会館・教育研究センター	自学自習支援(小学生版「くりはら塾」での講師)	14		33		
8/24～8/25	角田市内小学校②	自学自習支援	8		16		
8/24～8/25	柴田町立船岡小学校	自学自習支援	1		2		
12/24～12/25	大和町立宮床中学校	自学自習支援	1		1		
12月25日	大郷町立大郷小学校	自学自習支援	4		4		
12/25～12/27	栗原市文化会館・教育研究センター	自学自習支援(小学生版「くりはら塾」での講師)	13		23		
12/25～12/27	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科、教材作成・指導を含む)	15		26		
12/25～12/27 1/5～1/7	岩沼学び塾	自学自習支援(中学生対象)	8		14		
1/4～1/6	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援	11		29		
1/5・6 1/16・17	柴田町立船岡中学校	自学自習支援	3		8		

① 学府くりはら塾(栗原市内中学生)

本講習では、事前に学生が準備した問題や高校入試の過去問等をプリントし、それに取り組ませた上で、ポイント解説を行うことにしている。

〈夏季〉8月16日～20日 栗原市教育研究センター 参加学生16名

1～3年生を対象とする。国語・数学・英語の3教科の講義に加え、4校時には中学生が各自用意した問題演習への指導、助言や、学び方や進路相談にも応じている。

〈冬季〉12月25日～27日 栗原市教育研究センター 参加学生15名

3年生(受験生)を対象とする。国語・数学・英語の3教科について、高校入試の過去問等についての解説に加え、4校時には中学生が各自用意した私立高校の過去問への助言や、入試直前の心の持ち方、学び方や進路相談にも応じている。



② 気仙沼市学び教室(気仙沼市内小中学生)

〈夏休み学び教室〉8月18日～21日 気仙沼市内8中学校 参加学生15名

〈冬休み学び教室〉1月4日～6日 気仙沼市内8中学校 参加学生11名

午前中は小学生、午後には中学生を対象にした学習支援活動である。長期休業の課題や問題集に取り組む子どもたち一人一人への個別支援である。学習支援ばかりでなく、休み時間には心のケアの一環として子どもたちと積極的に触れ合うことに努めた。

会場となった中学校は、津谷中学校以外すべての学校の校庭に仮設住宅が建てられている。それだけ津波被害が大きく、盛り土や防波堤の工事は進みつつあるが、まだまだ被災の跡が残っている地域である。そのような中、休業中にも関わらず学習会に集まってくる子どもたちの熱心な姿に応えるため、学生たちも学習支援や休み時間での心のケアに懸命に取り組んでいた。



休み時間の触れ合い



冬休み学びの教室

③ 岩沼学び塾(岩沼市内小中学生)

〈夏季〉 8月3日～7日、18日～21日 中央公民館、岩沼西小学校、玉浦小学校

小中学生対象 参加学生7名

〈冬季〉 12月25日～27日、1月5日～7日 中央公民館

中学生対象 参加学生8名

今年度は、津波被災地域の玉浦地区だけでなく、岩沼市内の小中学校の児童生徒を対象にした学習支援活動となった。長期休業中の課題や問題集に取り組む子どもたちへの個別指導が中心で、冬の学び塾は、受験に向けた復習や過去問対策指導などが行われた。夏・冬とも他大学の学生と連携しながらの学習支援活動であった。



夏、岩沼西小学校で



冬、中央公民館で

④ 名取市立関上中学校

8月3日～7日 参加学生12名

関上中学校へは、仮設校舎での夏休みの学習支援に他大学の学生とともに学生を派遣している。今年度は本学学生7名、愛知教育大生5名が参加し、5日間とも午前午後、学年ごと教室に分かれて自学自習への学習支援が行われた。また、校長先生の講話や教頭先生による旧校舎見学などの被災地の研修が行われた。関上中学校は、旧校舎解体に伴い10月10日にお別れ式が行われ、平成30年度からは小中一貫校として新しく再建される予定である。なお、学生同士互いに交流深め、その後、愛教大生が被災地への理解を更に深めようと、他の友人や本学学生とともに関上中学校を訪問し、震災後の学校対応や旧校舎の見学などの研修を重ねていた。



学生が連携した学習支援



旧関上中学校校舎屋上にて

⑤ 登米市立南方中学校

8月3日～7日 南方公民館・改善センターほか 参加学生14名

今年も、京都教育大学生6名、大阪教育大学生5名を派遣した。毎年、前年度の参加者の何人かが翌年度も参加を希望することから、派遣先を変更せずに継続している。

本学学生3名については、帰省先である実家より通う学生に限定した。共に宿泊し交流を図ることはできなかったが、年長者で、教育実習等で経験豊富な県外からの参加者から学ぶことが多かったとの感想があった。

なお、前日予定していた被災地見学は新幹線の架線事故で実施できず、3日目午前南方中学校の理解を得て、南三陸町の旧戸倉小学校、五十鈴神社、南三陸さんさん商店街（復興市場）を見学した。



□ 平成27年度 教育復興支援ボランティア協力大学

	大学名	支援先	実人数	延人数
1	東京学芸大学	志津川中学校	6	30
2	群馬大学	志津川中学校	2	8
3	愛知教育大学	関上中学校	5	25
		志津川中学校	5	20
4	大阪教育大学	南方中学校	5	25
5	京都教育大学	南方中学校	6	30
6	奈良教育大学	丸森中学校	2	8
		志津川中学校	5	20
7	福岡教育大学	気仙沼市内小中学校（夏期）	6	23
8	東北学院大学	富谷中学校	1	2
9	早稲田大学	気仙沼市内小中学校（夏期）	3	12
計			46	203

2 教員補助事業

教員の負担軽減のため支援地域に学生を派遣して、授業中の教員補助や放課後塾、課外活動支援を実施しています。

日程	実施場所	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学
継続	仙台市立荒浜小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	2	-	
継続	仙台市立蒲町中学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	4	-	
継続	女川小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	4		
継続	岩沼市立玉浦中学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	11		
継続	宮城県美田園高等学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	5		
5月20日	宮城県立利府支援学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	1	1	
5月23日	宮城県立石巻支援学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	3	3	
8/17~8/21	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援	10	(6)	47 (30) 東京学芸大学
9/1~9/4	南三陸町立志津川中学校	教員補助	14	(12)	56 (48) 愛知教育大学、奈良教育大学、群馬大学
9/1~9/4	南三陸町立名足小学校	教員補助	6	24	
9/5~9/6	仙台市立荒浜小学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	7	12	
9/16~9/19	福島県会津若松市 (大熊幼稚園、大熊小・中学校)	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	13	52	
9/24~9/25	丸森町内小学校	教員補助	6	10	
10月3日	仙台市立中野小学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	5	5	
10月31日	宮城県立石巻支援学校	学校祭の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	3	3	
10月31日	仙台市立中野小学校	学芸会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	7	7	
2/15~2/19	福島県会津若松市 (大熊幼稚園、大熊小・中学校)	教員補助	22	88	

① 仙台市立荒浜小学校(運動会)

9月5日 七郷小学校

荒浜小学校児童16名と荒浜地区住民による運動会が開催された。荒浜小学校には、発災当時から学習支援ボランティアとして関わり、運動会にも毎年参加してきている。これまでの運動会は、校舎を借りて教育活動を行っている東宮城野小学校を会場に実施してきた。本年度は、最後の運動会となるため、できるだけ荒浜地区に近い七郷小学校を会場に地区住民との合同で行われた。

参加した7名の学生は、前日の準備から関わり、当日は準備後片づけのほか、子どもたちへ提供された『くじ引きコーナー』の運営に携わった。

最後は、子どもたち、地域住民、学校職員、その他運営に関わったボランティア学生など全員による「荒浜音頭」の踊りで盛り上がる事ができた。



くじ引きコーナーで



盛り上がった「荒浜音頭」の踊り

② 仙台市立中野小学校(運動会)

10月3日 中野小学校

中野小学校の児童40名と中野地区住民による最後の学区民運動会が開催された。

中野小学校には、発災当時から学校や仮設住宅へ学習支援のためのボランティア活動を行っている。昨年度までは、多くの学生が授業支援や放課後支援に関わってきたが、本年度より運動会と学習発表会の学校行事を中心にボランティアとして教員補助支援を行っている。

当日は最後の運動会でもあり、市内各地に居住する中野地区の多くの住民が参加した。昨年度までボランティア活動に関わってきた3名の卒業生も加わり、学生たちはそれぞれの種目の準備・後片づけ、演技補助に汗を流していた。全員参加のジェンカのダンスでは、学生たちも参加し、一つの列になるまで大変な盛り上がりを見せた。



順位確定のために



地域の方々と一緒にジェンカを

③ 丸森町立丸森小学校、小斎小学校、舘矢間小学校

9月24日～25日

丸森町内の3つの小学校において、2日間、9時過ぎから15時30分ごろまで、学校の通常授業への支援を行う教員補助活動が行われた。本学の学生6名が各小学校に分かれ、学習支援や放課後の児童の遊び相手などの教員補助を務めた。今年度は、曜日の関係で2日間の実施となり、他大学との交流はできず、また、教育長講話や沿岸被災地の視察研修も取りやめとなった点は残念であった。



④ 南三陸町立名足小学校

9月1日～4日

参加学生6名。授業時間中の教員補助（T2、T3）

昨年に引き続き、夏休み明けのこの時期に教員補助として本学学生6名が各教室に入り、始業から授業中の教員補助、給食指導、放課後送迎バスが来るまでの間の遊び相手や学習指導、バスの見送りまで、長い一日を過ごした。

なお、同じ日程で実施された志津川中でのボランティア活動参加の愛知教育大生5名、奈良教育大生5名、群馬大生2名とともに、被災地視察（旧戸倉小跡地、五十鈴神社、防災庁舎の見学）を行うとともに、隣接する民宿への宿泊のため、夜の情報交換も行われ、有意義であったとの感想があった。



⑤ 宮城県立石巻支援学校

〈運動会〉5月23日

受付、競技の準備、児童生徒の介助等、教員補助を行った。

なお、今年度初めて5月20日に開催された利府支援学校の運動会へも学生を派遣し、競技の準備等の教員補助を行っている。

〈学校祭〉10月31日

学校祭運営等の教員補助。受付、会場設営、児童生徒の管理等。

なお、今年は当日支援学校で、石巻市内の高校3年生（本学への進学希望）と卒業生である本学1、2年生との交流が図られ、有意義であったとの感想があった。



利府支援学校運動会（スーパーアリーナ会場）

⑥ 宮城県美田園高等学校

学習サポーターによる学習支援（高校での履修内容以外に、中学校での学習内容の学び直しをも加えた個別学習支援）。

全17週（8・9月、2・3月はなし）、原則日曜日2名、月曜日1名の派遣。本学学生5名、延べ48日。

〈前期〉4月26日～7月21日

〈後期〉10月11日～12月14日

スクーリングが開催される日・月曜日、13:00～17:00（4時間）の指導。

当初、高校生の参加者、質問も少なかったが、回を重ねるごとに指導助言を求める人数が増えてきた。



3 教員研修等事業

震災復興に関わる教職員を対象とした防災教育や教育臨床支援のセミナー、研修会等の開催をしています。

日程	実施場所	実施内容	派遣 実人数	参加人数
7月6日	東松島市コミュニティーセンター	「ハザードマップの作り方」「防災教育の必要性」	派遣	32
7月27日	蔵王町役場	蔵王町教職員研修会～志教育と学力向上について～	派遣	50
7月28日	大崎市立沼部小学校	「ハザードマップの作り方」「防災教育の必要性」	派遣	40
8月22日	TKP新宿ビジネスセンター	関東圏同窓生ネットワーク総会	派遣	16
9月3日	仙台市福祉プラザ	仙台市地域保健福祉計画の策定過程におけるワークショップ ～復興過程における支え合い活動の経験を、これからの活動に活かすために～	派遣	25
9月4日	仙台市教育センター	仙台市小学校長会研究協議会 ～世界が注目する仙台の防災実践、国連防災戦略「仙台防災枠組み2015-2030」採択地として～	派遣	124
10月30日	大崎市立沼部小学校	防災教育の公開授業の指導	派遣	50

① 東松島市教育委員会「教師塾」

7月6日 東松島市コミュニティーセンター

市内小中学校の教員32名を対象に「子どもの学ぶ意欲を引き出す授業づくり」をテーマに講話をする。この「教師塾」は、市立学校の若手教員を対象に、指導力の向上と魅力ある教員の育成を通して震災からの教育復興を目的に開催されている研修会である。

内容は、児童理解や生徒理解の基本について触れ、よりよい人間関係の構築こそが効果的な授業展開のベースとなることを説く。また、授業中、教師が無意識に行っている様々な所作が児童生徒の学習意欲に大きく影響していることを、一つ一つの事象を確認しながら理解を促した。

最後に、あらゆる場での児童生徒に対する適切な評価が学習意欲となり、ひいては一人一人の学力保証に結びつくことを知らせ結びとした。



② 蔵王町教職員研修会

7月27日 蔵王町役場

町内すべての幼稚園と、小中学校の教職員を対象に開催された研修会である。今年度は、蔵王町として宮城県から「志教育支援事業」の指定を受けており、町立幼稚園から小学校、中学校と全町挙げてキャリア教育に取り組んでいる。

講話の概要としては、志教育のめざすことを確認した上で1年間の期間の中でできる研究の可能性について触れた。

さらに、「志教育」の研究指定が、日々の教育活動と乖離することなく研究として実効性に結びつけるための在り方を模索する大切さについて説いた。さらに、そのための学校における共同研究の特質について確認し合い、各園、各校における従前の共同研究の在り方に関する振り返りを行いまとめとした。



③ 関東圏同窓生ネットワーク総会

8月22日 TKP新宿ビジネスセンター

関東圏で教員としてスタートした、本学の卒業生を対象に総会の場で講話を行った。

内容としては、本学の教育復興支援センターの支援実践部門の活動の概要について、主に学生による教育復興に関する活動を中心に講話を行った。特に、平成24年度から起ち上げられた「教育復興支援ボランティア協力員」について、その構成、年間の活動の様子を紹介した。

また、一つの成果として、平成27年3月に開催された第3回国連防災世界会議において、本学が主催または共催した総合フォーラムやシンポジウムで自分たちの活動について発表できたことや、仙台近郊の被災地へのエクスカージョンを企画実践できたことも紹介した。

また、宮城県各地の被災地へ、多くの学生が児童生徒の学習支援や教員補助のボランティアのために出向していることも報告することができた。



4 子ども対象・参加イベント事業

実践的授業支援として、ものづくり教室、理科実験授業、学生によるミニコンサート授業や留学生を活用した国際理解教育等を開催しています。

日程	実施場所	実施内容	派遣 実人数	参加人数
6月14日	仙台市縄文の森広場	こども☆ひかりフェスティバルの補助	13	
8月1日	仙台市立西山中学校	女川町民を対象とした交流イベント	2	
11月21日	東六郷小学校	東六郷小学校学校祭での演奏披露	5	
11月28日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	7	
3月19日	仙台市立東六郷小学校	卒業式での音楽指導ボランティア	2	

① 女川を元気にする会

8月1日 女川町総合体育館

「女川を元気にする会 2015」には、仙台市内の西山中学校や郡山中学校、桜丘中学校の3つの学校の生徒21名と2名の本学学生が参加した。はじめに女川町野々浜で、地域の方の指導のもとホタテなどの養殖現場を見学し、その後女川町総合体育館で、仮設住宅民との交流に臨み、中学生の輪読によるメッセージ発表と「花は咲く」「ふるさと」の合唱、高校生の演奏、大学生のパフォーマンスなどが披露され、最後に参加者の方々に焼きそばを提供して交流を深めた。



5 心のケア支援事業

被災した児童・生徒の心のケアに関する相談受付や教職員の学校教育に関する講習会等の実施しています。

日程	実施場所	実施内容	派遣 実人数	参加人数
8月11日	東京エレクトロンホール宮城	こころの復興フォーラム	—	1000
1月27日	宮城県気仙沼合同庁舎	学力向上フォーラム in 南三陸		60

1 学力向上フォーラム in 南三陸

1月27日 宮城県気仙沼合同庁舎

「ここにもあった『確かな学力』の向上策」

南三陸教育事務所管内の小中学校教員、指導主事約60名を対象とした講話である。

標題のとおり、全体的には学力向上についての講話であるが、講話の中で、本センターが発行している教員向け情報誌「ちょっとたいむ」取材時における、次のようなエピソードを紹介した。ある学校で屋上での写真撮影を行った際に、案内した教員は屋上には出られなかった。その時は気づかなかったが、被災時の傷がまだ癒えていなかったとのこと。その後、電話で配慮不足を詫びたところ、「今回取材に応じて、被災時の話をしたことで気持ちが楽になった」との言葉をいただいた。

子どもたちの心のケアにはばかり目がいっているが、教職員の「心のケア」もまだまだ必要であることを説いた。



6 こころざし・キャリア教育事業

被災により夢を失わないよう志を高く持つためのキャリア教育事業として、先輩や著名人による児童・生徒対象講話等の開催しています。

日程	実施場所	実施内容	派遣 実人数	参加人数
12月17日	仙台市立寺岡小学校	キャリア教育の底力～東日本大震災を経験して見えてきたこと～		45
1月26日	八戸市立小中野公民館	学校・家庭・地域の絆がはぐくむキャリア教育		76

1 寺岡小学校キャリア教育研修会

12月17日

「キャリア教育の底力～東日本大震災を経験して見えてきたこと～」

2 八戸市キャリア教育研修会

1月26日 八戸市立小中野公民館

「学校・家庭・地域の絆がはぐくむキャリア教育」

大震災からの復興も、様々な形で進んできており、教育分野では復興教育、防災・減災教育を中心に、広く実践が展開されている。宮城県内はもとより、東北、北海道でも多くの実践報告がなされている。

一方で、復興や防災の先にあるものとして、「生き方教育」としてのキャリア教育に注目が集まり始めている。寺岡小学校では、大震災の経験を生かす場としてキャリア教育（自分づくり教育）に取組み、成果を残している。全国のモデルとなる内容である。

他県からの協力要請もあり、被災地における新たな教育創造への支援という形で、応えている。



資料「学生が学習支援ボランティアに関わった津波被災校 6年間の児童生徒数の推移」

【気仙沼市】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
気仙沼小	314	299	416	385	312	296	
南気仙沼小	357	224	閉校				
鹿折小	356	286	263	239	217	229	
大島小	116	96	81	66	62	56	
松岩小	436	433	424	393	386	345	
階上小	241	245	231	228	216	218	
面瀬小	423	421	394	367	362	339	
唐桑小	155	138	126	113	96	91	
小原木小	68	58	50	45	41	33	
大谷小	214	215	215	198	194	183	
津谷小	247	237	242	234	219	203	
気仙沼中	345	316	291	260	261	259	
鹿折中	231	220	208	193	183	164	
大島中	88	81	75	68	56	48	
松岩中	258	255	248	238	231	236	
階上中	167	148	130	115	121	113	
面瀬中	215	205	210	225	229	224	
唐桑中	193	167	158	136	134	152	
小原木中	33	39	35	36	29	閉校	
大谷中	121	116	99	92	94	107	
津谷中	155	149	134	136	135	146	

【南三陸町】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
志津川小	457	438	282	280	271	250	
戸倉小	107	76	71	77	71	68	志津川小内 27年10月～新校舎
名足小	105	74	72	64	63	67	伊里前小内 25年11月～新校舎
志津川中	313	244	250	224	246	221	
戸倉中	74	56	55	43	閉校		(志津川中へ併合)

【女川町】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
女川第一小	239	210	192	統合			女川二小内
女川第二小	217	182	127	統合			
女川第四小	17	6	5	統合			女川二小内
女川小				282	251	232	
女川第一中	246	213	206	統合			
女川第二中	11	13	13	統合			女川一中内
女川中				203	197	171	

【名取市】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
閑上中	154	125	128	113	103	87	

【岩沼市】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
玉浦小	345	331	326	321	353	368	
玉浦中	165	148	160	168	173	156	

【亶理町】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
荒浜中	145	101	99	95	86	92	
吉田中	114	107	116	115	113	105	

【仙台市】

学 校 名	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	備 考
荒浜小	91	58	47	37	23	16	東宮城野小内
中野小	159	95	86	68	57	40	中野栄小内
六郷中	383	402	403	386	377	350	
七郷中	480	500	513	495	468	464	

【宮城県教育関係職員録＝一般社団法人宮城県教育会館＝】から抜粋



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

III

研究開発部門

研究開発部門では、2013年4月に特任教員（教授・准教授各1名）を配置以降、過去3年間にわたり、被災地の状況の把握や、東日本大震災の学校での経験に学び、今後の学校安全、防災に活かしていく方法を検討し、それらを国内外の他機関へと発信し、共有していく取り組みを継続した。2015年3月末の特任教授の退職以降、かねてから共同研究を実施していた研究者を2015年10月から本部門の客員研究員として迎え、関連研究を展開させた。

センター教員に限ったものだけでも、論文38本、学会等での発表・講演40件をこえる研究成果公開を行った。これらに兼務教員による同様の学術発表（その一部は、当センター紀要に収録）を含めると、全体として相当数の成果を発表したことになる。

こうした成果発表の媒体として、研究開発部門では、「教育復興支援センター紀要」を年報として計4巻刊行し、合計42本の論文がまとめられ、インターネット上に無料で公開した。

また、当センターでは、小規模な組織として、学内外の関係機関と連携した活動を推進してきており、震災復興・防災に関連した共同研究もその一環として活発に行われた。こうした共同研究を通じて醸成した連携関係が、防災に関する共同プロジェクトや、セミナー等の開催にもつながった。震災からの復興状況や、諸外国の防災への取り組みなどを学ぶため定期的開催された「復興カフェ」は合計23回を数える。

さらに、国際的な研究プロジェクト連携に経験豊富な教員らにより、東日本大震災の被災地の学校現場におけるローカルな体験を、本センターの実践を通じて、グローバルな災害復興・防災実践に還元させる活動も展開した。2004年のスマトラ沖地震で甚大な被害を受けたインドネシアのアチェ州や、東日本大震災の直前に大地震が発生した、ニュージーランドのクライストチャーチ等の研究者との交流を深化させ、知見の共有や学術的討議を行ってきた。こうしたグローバルな展開の一環として、2015年3月に仙台市で開催された第3回国連防災世界会議において、本学が文部科学省と共催して行った東日本大震災総合フォーラムや、各種パブリックフォーラムにおける展示・発表等の実施にあたり、当センター内に、国連防災世界会議企画調整室を設置して、実施の準備・調整を行った。

当センターのプロジェクト最終年度にあたる今年度は、連携機関との共同研究を継続するとともに、蓄積された知見を国内外の研究機関や防災実践者に公開・発信することに注力した。また、最近発生した大規模災害の調査を行い、東日本大震災からの復興に関する知見の提供と、かかる災害復興との比較・分析などを行った。

今年度の取り組みについては、以下に記載する。

1 震災復興・防災に関する調査・研究成果の学術発表—東日本大震災からの教訓と知見の蓄積—

所属教員の専門性を活かし、津波被災地に特有な自然環境（地震災害や津波災害に関わる地盤特性と地形地質などの環境）と社会環境（主に地域社会の仕組みや居住環境）の把握に努め、津波 災害からの避難行動に関する事例について情報収集を行った。また、2015年9月に発生した宮城県北部の大雨災害について、日本地理学会災害対応委員会地域拠点として、本部門所属教員が緊急調査に参加し、その結果をウェブ上で速報し、またボランティア学生への情報提供等を行った。

今年度中に特任教員が実施した学術発表は以下の通り。

（執筆・著書）

小田隆史「災害の避難空間を想像するフィールドワーク—内部者として、外部者として」、吉原直樹・仁平義明・松本行真編（2015）：『東日本大震災と被災・避難の生活記録』の第2部・pp235-262，六花出版

（学会・研究会発表）

国内

小田隆史（2015）：災害を地球規模課題として扱う社会科学習に向けて：ポスト2015アジェンダの理解を通じた教育実践の試み，日本社会科教育学会第65回全国研究大会シンポジウム，社会科にける復興教育の可能性をさぐる—新たな地域創生と社会参画—，仙台

小田隆史（2015）：被災地の教員養成大学が果たし得るローカル／グローバルな結節機能，日本教育経営学会第55回大会ミニシンポジウム，教育経営と災害復興・防災教育のこれらに向けて，東京

小田隆史（2015）：日系アメリカ人のポスト3.11日本に対する眼差し：映画『東北からの物語』上映キャラバンに帯同して，東北地理学会春季学術大会，仙台

小田隆史・関根良平・庄子元（2015）：仙台防災枠組2015-2030にみる地理学と防災・復興教育：第3回国連防災世界会議の成果から（速報），日本地理学会春季学術大会被災地再建研究グループ研究会，東京

海外

Oda, Takashi and Shoji, Gen (2016) : Post-disaster Emergency Communication for School Evacuation Shelters: A Spatial Analysis of the Sendai Municipal Disaster Prevention Radio System, UNISDR Science and Technology Conference on the implementation of the Sendai Framework for Disaster Risk Reduction 2015-2030, Geneva, Switzerland

Oda, Takashi (2015) : Considering Geographers' Actions in the Post-2015 Agenda for Global Challenges and Future Earth Initiatives, 第10回中日韓地理学会議, 上海, 中国

Oda, Takashi (2015) : Development of teacher-training programs for disaster mitigation: a case from Japan's education sector post 2011 mega disaster, the 2nd CAPEU Workshop on Disaster Awareness, Preparedness & Management, Yogyakarta, Indonesia

Oda, Takashi (2015) : The Roles of Geography Education in Disaster Risk Reduction, Association of American Geographers annual meeting, Chicago, Illinois, USA

Kumagai, K., Nakamura, Y., Oda, T. (2015) : Fieldwork Practice and Commitment at Tsunami-hit Area: Ochanomizu University's Students in Rikuzentakata-city, Iwate Prefecture, Japan, (poster) Association of American Geographers annual meeting, Chicago, Illinois, USA



2015年9月宮城県北部の大雨災害調査
(2015年9月12日・大崎市)

2 共同研究

「復興教育学」創設室プロジェクト等の復興・防災教育関係の学内プロジェクトに参加するとともに、昨年度に引き続き、国立大学法人東北大学や国立大学法人お茶の水女子大学などの学外機関とともに、震災復興支援及び東日本大震災の経験を踏まえた新たな防災教育に関する共同研究を実施して、それぞれの研究機関が有する特長を活かしながら、知見の交換や情報発信を行った。

共同研究の課題一覧

学内プロジェクト「復興教育学」創設室のメンバー機関として、主に以下の研究プロジェクトを実施

- (1) 研究代表者 野澤令照 副センター長・特任教授
プロジェクト名「「仙台防災枠組」を踏まえた防災・復興のための国際協力の展開」
- (2) 研究代表者 野澤令照 副センター長・特任教授
プロジェクト名「復興期における震災の教訓を踏まえた防災教育・サバイバル学習の実証・実践」

(学外機関との共同研究)

1. 東北大学災害科学国際研究所

- (1) 研究代表者 佐藤 健 災害科学国際研究所 教授
課題「防災教育国際協働センターを拠点とした地域に根差した防災教育モデルの創造」
- (2) 研究代表者 櫻井愛子 災害科学国際研究所 准教授
課題「大災害被災地の学校における学校防災体制の強化に関する研究」

2. 東北大学大学院環境科学研究科

研究代表者 関根良平 環境科学研究科 助教
課題「津波被災地における水産経済の再建に関する地理学的研究：水産業の連関構造に注目して」

3. お茶の水女子大学

研究代表者 水野 勲 基幹研究院 教授

課題「東日本大震災による福島県を中心性と圏域の変容に関する地理学的研究」



東北大学と教育復興に関するネパール地震緊急調査を実施
(2015年12月・コカナ村)

3 グローバルな連携の構築・海外発信

災害からの教訓は、広く国内・国外に共有継承されてこそ活かされる。本センターでは、国内外の他の関係機関と連携して、上述の震災からの経験、教訓、知見を共有するとともに、同じく大きな災害を経験した他の被災地と協働して知恵を出し合いながら、復興を前進させるための一助とすることを目指した。

本学はこれまでも環境教育や持続発展教育 (ESD)、ユネスコスクールなどの取り組みを通じて国際社会とのネットワーク構築に積極的に取り組んできた。こうしたことから、様々な機会を捉えて海外への情報発信を行ってきた。

8月には、研究開発部門の小田特任准教授がアジア工科大学院 (AIT・タイ王国) に招かれ、同大学院の防災減災管理大学院 (DPMM) における2単位15時間分の集中講義「学校と防災」(英語) を担当し、東南アジア諸国の学生に対する東日本大震災の学校における経験・知見を共有するとともに、同機関の災害関係研究者との交流を深めた(詳細は、本センター紀要第4巻にて報告)。



アジア工科大での「学校と防災」の授業風景
(院生の課題発表・2015年8月)



アジア工科大・防災減災コース教授陣との学術交流
(2015年8月)

東日本大震災

10月には、小金澤孝昭附属国際理解教育研究センター長・教授、市瀬智紀教授（ともに本センター兼務教員）および小田隆史特任准教授が、インドネシアのジョグジャカルタ国立大学で開催されたアジア太平洋教育大学コンソーシアム（CAPEU）の年次大会に招かれ、防災ワークショップにて、各国の教育大学長や現職教員に対して、東日本大震災後の教育復興や、震災の経験を踏まえた教員養成プログラムにおける新たな防災教育のあり方に関する講演を行った。



アジア太平洋教育大学コンソーシアム防災ワークショップでの講演
左から市瀬教授、小金澤教授（2015年10月・ジョグジャカルタ）



アジア太平洋教育大学コンソーシアム会合開催の告知看板
（2015年10月・ジョグジャカルタ）

同じく10月、ASEAN9カ国と東ティモールを対象とした外務省の若者招日プログラム「JENESYS 2015」で来日中の約40名の大学生が仙台を訪れた。仙台市荒浜と名取市閑上を訪問中、本学学生が英語で現地を案内するとともに、当部門にて交流がある、東北大学に留学中のインドネシア・バンダアチェ出身のAlfi Rahmanさんから、アチェでの津波被害や、津波伝承に関する話を聞き、自然災害や防災について各国の若者に学ぶ機会となった。



海外研修生に英語でガイドする本学学部生
（2015年10月15日・名取市閑上）

4 復興カフェ in Miyakyo

教育復興支援センターでは、日頃の復興支援活動や、新たな防災教育に役立てるため、災害復興や防災・減災に関連するテーマでの話題提供し討議する場として、「復興カフェ」を実施してきた。

今年度実施した復興カフェの概要は以下の通り。

第18回	7月7日(火) 9:30～10:30	☆ところ：2号館3階 230番教室 ☆テーマ：「東日本大震災を伝える」 ～山形県の中学生をお迎えして ☆報告者：峯田清人氏、首藤大知氏、伊藤芳郎特任教授
第19回	7月14日(火) 16:20～18:00	☆ところ：2号館2階 226番教室 ☆テーマ：「いわき市の復興－「環境と開発」実習報告」 ☆報告者：「環境と開発」実習参加学生 担当教員：西城潔教授・小田隆史特任准教授
第20回	8月24日(月) 15:00～16:00	☆ところ：教育復興支援センター・2F 会議室 ☆テーマ：「学習支援ボランティアを通じた宮城と愛知の架け橋」 ☆報告者：愛知教育大学生 市川 真基氏、伊藤 誉之氏、中島 恵氏
第21回	10月28日(水) 12:15～12:55	☆ところ：萩朋会館前広場 ☆テーマ：「防サイエンスショー 楽しく科学・伝える防災」 ☆報告者：サイエンスインストラクター・防災キャスター 阿部 清人氏 ※学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業の一環として実施
第22回	11月26日(木) 12:00～12:50	☆ところ：中庭広場 ☆テーマ：「復興教育学創設室 キャンプ炊き出しプロジェクト」 ☆担当者：水谷好成教授、小野寺泰子准教授、鶴川義弘教授・福井恵子助手ほか
第23回	2月17日(水) 12:00～12:50	☆ところ：図書館展示スペース ☆テーマ：「三年間をふりかえって(英語による発表)」 ☆報告者：藤原忠和 研究・連携推進課主任 小田隆史 特任准教授

5 紀要

本センターでは、「教育復興支援センター研究紀要」を刊行し、本センターの活動に関係する調査研究、教育実践に関する論文等を集約、発信している。この紀要は、本学附属図書館のデータベースから電子ジャーナルとしても無料で論文閲覧が可能のほか、国立国会図書館にも献本している。

論文一覧は、「VI 資料編②刊行物」に掲載している。

6 その他 — 研究開発部門における学校連携等

研究開発部門に特任教員を迎えて発足してから3年目となる今年度は、同部門において蓄積した知見を教育現場に還元し、活かしてもらうべく、学校関係者との連携を深めた。

6月に実施された、本学附属3校園の「上杉キャンパス合同避難訓練」に参加し、当センター既存のテレビ会議システムを用いて、その様子を青葉山キャンパスに伝送する実験を行った。午前10時に震度6の地震が発生し、小学校給食室より火災が発生したことを想定して避難が行われた。



本学附属3校園合同防災訓練・園児の避難の様子
(2015年6月29日)



本学附属3校園合同防災訓練・全児童・生徒点呼
(2015年6月29日)

7月末、大崎市立沼部小学校にて『防災教育研修会』が開催され、小田隆史特任准教授が講話とワークショップの講師を担当した。同校学区では、夏休みに中学校区内で子どもたちとハザードマップづくりを行っており、そのための事前研修会として位置付けられ、身近な地域の地形や多発する自然災害の特徴について教員、保護者や地域住民が共に学ぶ機会となった。



大崎市立沼部小学校・防災教育研修会
(2015年7月28日)



大崎市立沼部小学校・防災教育ワークショップ
(2015年7月28日)

さらに、9月初旬には、仙台市教育センターにおいて、仙台市小学校長会研修部・学校課題委員会研究協議会において、小田隆史特任准教授が「世界が注目する仙台の防災実践：国連防災戦略「仙台防災枠組2015-2030」採択地として」と題する話題提供を行い、仙台市内の全小学校長とともに、国連防災世界会議にて採択された国際的防災枠組の意義と、地球規模課題として災害を捉え、学校現場で防災教育を展開していくことの重要性について考える機会とした。



仙台市小学校長会研修部・防災に関する講演（2015年9月4日）
（写真：仙台市小学校長会提供）

2015年6月10日 平成27年度第1回気仙沼ESD/ユネスコスクール研修会 指導助言者、気仙沼市中央公民館

2015年7月28日 大崎田尻地域 防災教育研修会・ワークショップ 講師ファシリテーター、大崎市立沼部小学校

2015年9月4日 仙台市小学校長会研修部・学校課題委員会 研究協議会 講師 題目「世界が注目する仙台の防災実践：国連防災戦略「仙台防災枠組2015-2030」採択地として」、仙台市教育センター

2015年12月12日・13日 お茶の水女子大学附属高校・大学ボランティア 南三陸・気仙沼訪問 現地引率教員



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

IV

人材育成

将来教師をめざす本学学生の資質・能力の育成を願って、ボランティア活動への積極的な参加を促してきた。震災の規模を考えると、数年程度で教育の復興が実現することなく、阪神淡路大震災の経験から、むしろ数年を経て生徒指導上の問題、心のケアの必要性が顕在化するという指摘もある。そのため被災地の市町村教育委員会や学校からの学生ボランティアへの派遣要請は継続され、それに応えるための学生の確保のためにも、各専攻・コースから1名以上の学生代表を選出し、ボランティア協力員とすることにした。

平成24年4月のスタート当初は、協力員を選出し代表者は決めたものの、何をすべきか手探り状態であった。しかし、運営委員が何度も顔を合わせ、その中で被災地の現状把握のための視察研修、不安解消会のアイデアなどが出され実行に移された。

また、協力員以外の先輩にあたる学生有志も活動に参加し、新聞づくりやiPad講習会も行われた。大学祭においても、学校現場で震災対応に迫られた先生方の話を伺ったり、復興カフェで外国の方々の講話をお聞きすることができた。また、復興大学で宮城教育大生としての活動報告を行うなどの経験をとおして、知識を得るだけでなく被災者への思いを深めるとともに、各種ボランティア活動に積極的に参加しようとする意欲が生まれ、学習支援を中心とするさまざまな活動が展開された。

これらの活動を支えてくれたのが、全国の教員養成系大学のボランティア学生である。特に、小中学校の夏休みの学習会への派遣要請の時期が大学の授業中と重なることが多かったことから、大学3、4年生、大学院生の参加が多かった。教育実習経験の豊富な他大学生と一緒にボランティア等活動に参加した本学学生は多くの示唆を得ることができたようである。

残念なことに本学学生においても、震災から年を重ねるにつれて、ボランティア活動に対する関心や参加意欲が薄れているのは事実で、組織、運営等の見直しが必要である。





1 ボランティア協力員の活動

① 新入生オリエンテーション 4月3日 仙台国際センター

入学式後のオリエンテーションで、教育復興支援センターの取組を示すDVD放映後、新2年生の代表からボランティア協力員の選出法、学習支援ボランティア等への参加の呼びかけが行われた。

② 総会 4月22日

前年度の活動報告、今年度の活動予定を説明した。
また、ボランティア協力員とは何かを説明するとともに、運営委員として積極的に活動するよう勧誘した。



③ 被災地視察研修

27年度は、2回にわたり学生の企画による被災地視察ツアーを開催した。南相馬市方面は福島原発の影響による被災状況について、気仙市・南三陸町方面は津波による被災とその復興の様子について視察することを目的とした。

6月6日（山元町・南相馬市方面）参加者23名

旧山元町立中浜小学校⇒南相馬市小高区市街⇒南相馬市小高区村上地区



津波に襲われた旧中浜小学校舎
(山元町)



解体できない津波の被害を受けた家屋
(南相馬市村上地区)

6月20日（気仙沼市・南三陸町）参加者26名

気仙沼市街⇒旧宮城県気仙沼向洋高校⇒南三陸町防災庁舎⇒旧南三陸町立戸倉中学校



復興仮設商店街の見学
(気仙沼市街)



津波で被災した防災庁舎の見学
(南三陸町志津川地区)

④ 不安解消会 7月8日

初めてボランティア活動に参加する学生の不安を取り除くために開催している。

ボランティア活動経験者による体験談、アドバイスに加え、「ボランティアの心構え」、「不安解消Q & A」の作成、配布している。



⑤ オープンキャンパス 7月31日

宮城教育大学を訪れた入学希望の高校生、教員、保護者等へ教育復興支援センター、ボランティア協力員の取組等の説明を行った。



⑥ 大学祭 10月24日～25日

〈展示の部〉4年間の協力員活動のあゆみ、学習支援ボランティア活動のポスター、防災グッズ。工作（紙コップ、スリッパ）

〈他団体連携〉パネル展示（被災地写真）、震災関連映像資料のDVD視聴（「東北地域づくり協会」の協力）
展示ブースでは、今年度の学祭のテーマを「復興⇄福幸」とし、協力員の4年間の活動のあゆみや今年度実施した6つの学習支援ボランティア活動等の様子が描かれたパネルを展示し、協力員が来場者へ展示資料の説明にあたった。また、来場者と防災グッズ（紙コップ、スリッパ）作製を行い、交流を深めた。

他団体連携では、一般社団法人東北地域づくり協会との協力によるパネル展示や震災関連映像資料のDVD視聴も行い、被災地の被害状況を比較することができた。

今回の大学祭への企画運営にあたって、2年生代表の声かけと多くの協力員の応援が学生主体の活動を導きだし、取組を通して学生が成長していく活動となった。



⑦ 総会・ボランティア報告会 1月20日

本年度の活動報告と次年度に向けた取組について協議した。本年度は、各種行事やボランティア等活動に対する1年生の参加が少なかったことから、新入生に対するボランティア活動への参加をどう促すかが話題となった。

2 国連防災世界会議（学生企画） 平成 27 年 3 月 14 日～ 18 日

宮城教育大が参画した中で、ボランティア協力員を中心に学生が関わったものを中心に報告する。

①ブース展示

開催期間中、市内数か所で本学、センター、ボランティア学生の活動を展示するブースを設け、展示、説明を行った。その際、また、7か国語からなる小冊子「3.11を忘れない (Reminder of 3.11)」を配布し、好評であった。



②東日本大震災・総合フォーラム（文部科学省、日本ユネスコ国内委員会との共催）における英語による活動報告

③パブリック・フォーラム（復興大学主催）での発表

震災以降現在に至るまでの本学、センター、学生ボランティアの多様な活動を報告するとともに、成果と課題を発表した。

なお、発表者の一人が編集した小冊子「3.11を忘れない」を配布した。



④ エクスカーション（被災地視察）

会議参加者の中で被災地の視察希望者に対し、ボランティア協力員の学生が被災地である仙台市荒浜・名取市閑上方面へ案内した。事前に、見学先の荒浜小、閑上中の旧校舎、日和山等、現地調査を繰り返し、休憩先やトイレの場所と現状の把握など、きめ細かな「おもてなし」に努めた。英文のパンフレットづくりや、英語による説明も好評であった。

なお、地元テレビ局が学生の活動する様子を準備段階から取り上げ、数回放映された。



⑤ その他

仙台駅等で外国からの参加者に対して案内・誘導にあたるなど、本学学生の活躍の場は多く、それぞれの任務を着実に遂行することで、ごく自然に「人材の育成」が図られたように思われる。



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

V

新たな教育の創造に取り組んで

教育復興支援センターは、宮城県の教育復興に向けて、中・長期的な視点に立って児童・生徒の心のケアや学力の向上に取り組む拠点として設置され、実践部門、研究部門を配置し、それぞれの目的を目指して取り組んできた。

復興への取組も、1年後、2年後と時を経るにつれて、目指すべきことが変化してきた。大震災直後は、失われた町の機能や住環境を取り戻すことが第一だった。やがて、生活を立て直したり、人々の心を支えたり、次第に目指すべきところが変わっていった。

そのような中で、復興に関わることで、防災に関わることで、新たに目指すべきものが見えてきた。活動を通して広がりや、深まりが生まれ、当初の目的を超えて取り組むことも出てきた。ここに「新たな教育の創造」と題して、紹介する。

- ① 国連防災世界会議への取組だが、「震災の経験と教訓を仙台・東北から世界へ」と銘打って参画した。防災をテーマとした内容なので教育復興支援センターが中心となったが、内容からすれば全学を挙げて取り組むべきもので、センターの事業の範疇を超えたものであった。これまで蓄積してきた防災・減災への知見、学生ボランティア支援の成果を存分に活かすことができ、本センターの実践として、大きな足跡の一つとなるものと自負している。
- ② 「学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業」も当初のセンター事業構想には入っておらず、平成25年度から取り組んできた事業である。多くの事業予算を獲得できたことから、様々な事業を実施することができた。市民を対象に街中で開講した「宮教大防災連続講座」、高校生を対象とする「キャリア教育」、被災地の教職員の心を支え、県内の教員同士のつながりを深めるために発行した「ちょっとたいむ」、大震災の経験を後世に語り継ぐ各種の記録集の刊行など、数々の成果を残すことができた。この事業への取組も、教員養成を本務とする宮教大が、市民への学びの場の提供を通じ、広く地域社会へ貢献する道を開いたという点で、画期的な取組であった。
- ③ p4c (philosophy for children) は、ハワイ大学で開発された教育手法だが、「探求の対話」として仙台・宮城で展開してきた。いくつかの小中学校を中心に実践を重ね、成果を蓄積している。仙台から始まった取組が、白石、そして県内各地へと広がりを見せている。ここには、「命の教育」「生き方教育」の要素が盛り込まれており、被災地の復興に大いに役立つものとなっている。宮教大では、教育復興支援センターが中心となり、平成25年度から活動に取り組んできた。

1 第3回国連防災世界会議への参画

宮城教育大学では、2015年3月に仙台市で開催された第3回国連防災世界会議へ大学を挙げて参画した。国内はもとより海外の大学等と協働して防災に取り組んだことや全国の教育系大学と連携して学生ボランティアを派遣し、被災地の教育支援を行ってきた教育復興支援センターが中心となって活動した。

ここでは、その主なものを紹介する。

1 国連防災世界会議・東日本大震災総合フォーラム(3/16)

本事業のなかで最大の目玉となるイベントとして、第3回国連防災世界会議の公式フォーラム（東日本大震災総合フォーラム）を実施した。

ユネスコスクール等を通じてESDと防災・復興教育に取り組んでいる実践者や有識者を交えて、ESDが今後の防災・復興教育にいかなる役割を果たし得るかを議論した。

当日は、国内外から、中高生等を含む約1,100人も参加者を得て充実した討議が展開された。国内外のESDの実践者、有識者、及び防災の専門家を交え、所期の目的であった討論及び情報発信、ネットワーク形成など、大きな成果を残した。



＜宮城教育大学大学初等教育教員養成課程＞
 言語・社会系 英語コミュニケーションコース 3年 渡辺 涼子
 芸術・体育系 音楽コース 3年 八木沼 賢悟



＜気仙沼市階上地区＞
 気仙沼市立階上中学校 吉田 智美 教諭・生徒2名
 気仙沼市立階上中学校 PTA 菊田 篤 元会長



＜宮城県多賀城高等学校＞
 多賀城高校 小泉 博 校長・生徒2名

V 新たな教育の創造に取り組んで

○パネルディスカッション

コーディネーター：ショウ・ラジブ 京都大学大学院地球環境学学 教授・SEEDS Asia 理事長

登壇者：アレクサンダー・ライヒト 国連教育科学文化機関（フランス）本部ESD課長

アモーレ・デ・トレス キャピトル大学（フィリピン）副学長

今村 文彦 東北大学災害科学国際研究所所長・防災教育日本連絡会会長

菅原 昭彦 気仙沼市商工会議所会頭・仙台広域圏ESD・RCE運営委員

武田 真一 河北新報社論説委員会副委員長



② その他の活動

国連防災会議開催中に、数多くの関連事業が実施されたが、本学でもパネル展示、実践発表、スタディツアーや被災地視察研修など、数多くの活動を行った。本学の関係職員はもとより、学生が積極的に参加したことは、大きな意義があった。

実施時期	実施事項	摘要
2015年1月28日	ESDユネスコ世界会議振り返りワークショップ	宮城教育大学
2015年3月14日～3月18日	パネル展示：本学の防災関連の取組をパネル展示	仙台市民会館
2015年3月14日～3月18日	パネル展示&実践発表：本学の防災関連の取組パネルを展示し、教育現場の取組を発表	せんだいメディアテーク
2015年3月16日	スタディ・ツアー：仙台市と共催で、本学附属特別支援学校の防災関連の取組を視察研修	宮城教育大学・附属特別支援学校
2015年3月16日	東日本大震災総合フォーラム：ESDを通じた防災・減災の展開（国際シンポ）	東北大学・萩ホール
2015年3月18日	被災地視察研修：本学学生主催の被災地視察研修	仙台市近郊

2 教育大学防災ネットワーク (NUE)



東日本大震災支援活動から得た知見の共有ネットワーク構築について

東日本大震災において、学校は緊急避難所または生活避難所として大きな役割を果たした。学校の教職員は、発生直後には子どもたちの生命を守るべく尽力し、その後の5年間、子どもたちをケアし成長を支え続けている。宮城教育大学は、多くの教育系大学の協力を得て、こうした学校の教職員と子どもたちを支援する教育復興活動に取り組んでいる。

この取組の中で、様々な知見や教訓が得られた。たとえば、学校支援ボランティアとして学生を派遣するための知見、学校災害の調査研究から得られた避難所運営スキルや防災訓練の方法など、多くのものが蓄積されている。

2015年3月に仙台市で開催された国連防災世界会議を機会に、学校支援ボランティアを中心とした教育系大学間ネットワークを再構築し、このネットワークを介して防災・災害復興に焦点化した情報共有を図りたいと考えた。

そして、このネットワークを、ESD/RCEを通じた防災教育とリンクさせることで、実効性のさらなる高まりを目指している。

現在は、加盟している大学からの情報共有を中心に、活動を進めている。



3 学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業

教育の復興を推進していくとき、その担い手の育成が重要である。宮城教育大学では、教員養成という本来の人材育成に加え、当センターを中心にして、地域社会を豊かにするために活動する市民やリーダーの育成に取り組み始めた。被災地にある唯一の教育大学として新たな境地を開いた。

本学では、平成25年度から3年間、文部科学省の事業である本事業に参画し、その運営母体として「宮城教育大学被災地復興支援実行委員会」を設置し、学外からも有識者や県・市町村教育委員会の教育長など多くの方々から広くご指導をいただいて進めてきた。

事業の推進にあたっては、本学の教育復興支援センターを中心に、被災地の子どもたちへの学習支援、現場教員への支援活動など、地域コミュニティ再生支援に取り組んだ。この事業に取り組む意義は、大学改革が叫ばれる中で地域に根差した教員養成大学としての姿勢を明確に示せることや、社会総ぐるみの教育に求められる教師を養成できることなどが挙げられる。

<復興に向けて育てたい教師像>

- ① 学校は児童生徒の教育の場にとどまらず、地域住民の生涯学習の場となっていることから、地域連携の大切さを理解できる教師を育成したい。
- ② 社会総がかりの教育を推進するために、地域連携の重要性を理解し、コーディネートできる教師を育成したい。
- ③ 大震災からの復興を担う子どもたちを導くために、自らが復興や地域の抱える課題を把握し、解決に向けて努力する教師を育成したい。

学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業

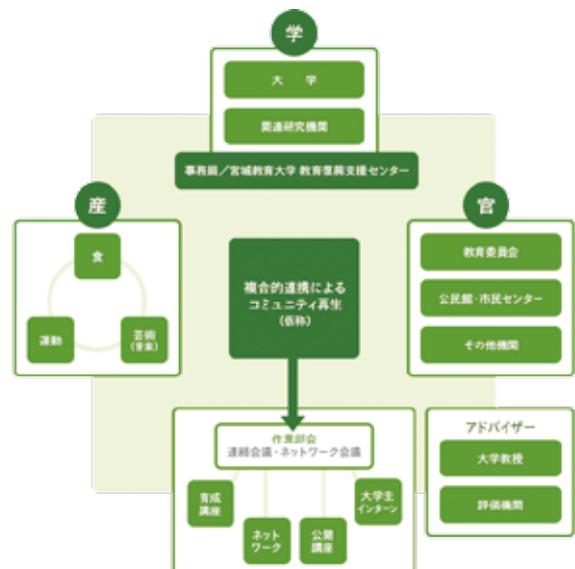
●取組の基本理念

産・官・学など多様な主体が連携して被災地の復興を推進するとともに、一過性のものとせず、長く地域に根差す仕組みづくりを実現する。

●事業概要

宮城県内の被災地における地域コミュニティの再生を目指し、学びを通じた支援事業を実施した。

地域の復興を支援するにあたり、被災地を抱える自治体との連携を図りながら、以下の内容を進めた。



V 新たな教育の創造に取り組んで

3年間の主な取組の概要

活動を担う人材育成

〈実行委員会事業〉この事業を推進する「実行委員会事務局」が行った事業

【教員支援塾の開催、教員支援情報誌「ちょっとたいむ」第1～8号の発刊】

支援塾の開催場所：学内・栗原市・気仙沼市など

情報誌の取り上げた場所・学校数：県内の市町村数20。学校数30校

内容：「教員支援塾」を開催し、学校現場で教員が抱える様々な問題の解決や支援に本学の教員がかかわり、勉強会や情報交換の場を設定して支援を行った。

先生方の明日を支える情報誌「ちょっとたいむ」は、被災の規模による地域間の温度差を縮め、被災地の現状を県内全教員が共有し合う目的で発刊した。平成26年度からスタートし、2年間で第8号を数え、情報の共有、連帯感の醸成が図られた。



【学生の自主的な活動の支援及び広報活動】

場所：学内・仙台市・県内

内容：本学の学生の主体的な活動を支援するもので、活動資金や場所を提供し、学生の自主的な活動を後押しした。事業パンフレットにより事業の周知を図り、HPで事業の進捗状況を情報発信することで、事業趣旨を地域社会に紹介した。

【学生企画「学び喫茶」】

場所：学内・気仙沼市・南相馬市

内容：被災地でボランティア活動に取り組む学生たちが、自ら企画した活動。被災地訪問や海外（フィリピン等）への災害支援を行った。

I 防災教育に関する事業

協働で取り組む防災教育の創造

【防災連続講座】

場所：H25 仙台駅直結複合施設アエル1階アトリウム
H26～27 仙台駅直結複合施設アエル2階アトリウム

内容：広く市民に防災に関する学びの場を提供するために連続講座を開催。(H25：1週間連続計15講座。H26：3日間連続計13講座。H27：2日間連続計14講座。) 東日本大震災の経験を次代へ語り継ぐ意識を醸成。



【震災体験の次代継承事業】

場所：仙台市、気仙沼市、女川町、亘理町、山元町、南三陸町

内容：震災体験の次代への継承活動は震災からの学びを次代の防災・減災に生かすための重要な取組である。これまで、気仙沼市、女川町、仙台市などの小・中学校の被災状況や教育復興への歩みについて、報告書や記録集に残す取組を行った。また、これまで冊子としてまとめてきた震災の記録や教育復興の歩みを、視・聴覚的な理解と集団での活用が容易になることから、中学生向けの教材としてDVDも制作した。

【地域のネットワークを生かす防災教育の取組】

場所：学内・気仙沼市・南相馬市

内容：震災の経験を未来に伝えるために、子どもと大人と一緒に学び、地域のネットワークを生かした防災教育を推進した。東日本大震災を記録したドキュメンタリー映画上映やブラジルから駆けつけたマリオ氏のチェロの演奏会も行った。

II 心とからだに関する事業

つながり再生目指す学びの事業

【女川町の子どもにおける学校内放課後を中心とした運動環境改善】

場所：女川町

内容：被災地女川町の被災直後から失われた子どもたちの運動環境を補充すべく活動を継続に実施した。(東北学院大学体育系研究室女川向学館)



【園芸療法の実証研究事業】

場所：仙台市

内容：被災地における有効な地域コミュニティ支援として園芸療法を行った。(東北大学加齢医学研究所)

【被災地における心のケア事業】

場所：仙台市

内容：震災復興に向けた実践事例、及び学校現場で苦慮している「子どもの心のケア(支援)」について対応事例の記録を、仙台市小・中学校長会と協働で作成し、今年3月には、第4号が完成した。

【食の学びによる地域づくり】

場所：仙台市・塩釜市(野々島)

内容：宮城の食文化資源を活用して、地域での「食の学び」の機会や実践の効果を多様な「地域づくり」に発展・進化させる。

Ⅲ 生き方に関する事業

活動を担う人材育成

【震災の記憶をつなぐ伝承事業(高校生キャリア教育)】

【p4c(子どもの哲学)を中心とした生き方を考える取組】[※]

場所：仙台市(H25～26アエルビル5階、H27仙台市生涯学習支援センター5階)

内容：県内の希望する高校生が、年齢が近い先輩の社会人の話を聞き、大学生や他校生とコミュニケーションを取りながら考えをまとめるワークショップを行った。自分の生き方を考えさせる、志教育、自分づくり教育につながるキャリア教育として提案することができた。(県内高校・漫才コンビ「ニードル」・宮城教育大学生)

※【p4c(子どもの哲学)を中心とした生き方を考える取組】別項参照



【キャリア教育に関する研究プロジェクト】

場所：仙台市

内容：震災前の姿を取り戻すのではなく、新しい時代を拓くために、生き方教育としてのキャリア教

育を推進した。優れた先行実践をもつ小中学校のケースを、モデルとして発信できた。

IV 地域づくりに関する事業

つながり再生目指す学びの事業

【泉パークタウン 花・まち・大作戦】

場所：仙台市（泉パークタウン 花・まち・大作戦協議会タウン内4小学校）

内容：花の育成・栽培を学校と地域・企業が共同して行うことで、交流体験による地域連携意識を醸成した。



【学生による津波被災地の地域コミュニティ復興支援】

場所：東北学院大学（市民性育成論講座）

内容：東北学院大学の「市民性育成論」受講の大学生が、自らの学びを被災者との活動体験によって深める活動を行った。

【ソーシャルキャピタルに関する研究】

場所：仙台市（政策研究大学院大学 教育政策プログラム）

内容：近年注目されているソーシャルキャピタルの視点で、アンケート調査による検証を継続し、そこから得た知見を、地域防災教育に活かす研究に参加した。

【土曜日の教育活動の支援】

場所：仙台市（市民センター・児童館・東北大学、放課後子ども教室・学校支援地域本部）

内容：児童生徒の健全な育成と同時に、関わる地域住民の生きがいづくりや地域の活性化を目指して、社会教育施設や大学と連携した多様な学びによる活動モデルを試行した。

【女川町つながる図書館事業】

場所：女川町

内容：津波被災地のコミュニティ再生を図るために「女川ふるさと検定」を実施した。女川を地理的・歴史的に知ること、世代を超えた交流やふるさと女川再発見ができる活動を支援できた。

4 探究の対話 (p4c : philosophy for children)

① p4c (philosophy for children) とは

日本でも認知度が高まりつつあるp4c (子どもの哲学)。1970年代にアメリカのマシュー・リップマンが開発した哲学対話は、その後世界各地に広がっていった。その中でも、学校教育において大きな成果をあげたハワイ大学のトーマス・ジャクソン博士による理念と手法が私たちが進めてきたp4cの原型である。具体的には子どもたちが問いを立て、コミュニティボールを使いながら、円座の中で対話し考えを深めていくもので、思考力の育成と人間関係づくりの両方を目指した教育方法の一つである。基盤にあるのは、「何を話しても否定されない、笑われない。皆がちゃんと聞いてくれる」という安心感 (セーフティ)。コミュニティボールと呼ばれる毛糸のボールには、「ボールを持った人だけが話せる」、「話したくなければパスできる」「まだ話していない人を優先する」などのルールがある。

② これまでの足跡

宮城では、東日本大震災の支援を契機として交流のあったハワイのワイキキ小の教員が2013年7月に仙台市立若林小を訪問した際に、p4cを披露したのが始まりである。翌月以降、仙台市内の小中学校の校長有志によるp4cの研修と学校での実践が積み重ねられてきた。講師を務めたのは、当時兵庫県立大学の講師であり、現在新潟大学の准教授である豊田光世氏である。氏はハワイ大学でp4c教育を学び、その後p4cの研究・実践に長く取り組まれた方で、現在も私たちの実践について、定期的に指導・助言を頂いている。2014年4月には公益財団法人上廣倫理財団の寄付により、宮城教育大学教育復興支援センターに上廣倫理哲学教育研究室が設置され、ここを拠点として、「p4cせんだい」の活動が始まった。その後、「p4cハワイ」との定期的な教員交流の中で研究実践が深まってきた。2014年の後半からは各教科における実践も広がり、各種公開研究会や研究発表会でもその成果が公表されるようになった。2015年夏には「p4cしろいし」が誕生する中、10月に開催された第1回p4c国際フォーラムでの大きな反響を契機に、「p4cみやぎ」として、宮城県内外の学校・地域への普及が始まりつつある。



宮城県教育庁
桂島義務教育課長の祝辞



パネルディスカッション



文部科学省
大杉教育課程企画室長の基調講演

3 p4cに期待できること

(1) 生徒指導上の課題解決につながる

昨今の教育に関する報道の中でひととき大きな話題となっているのが、いじめ問題である。原因として様々な要因が取り上げられているが、共通していえることは、子どもたちが人間関係をうまく構築できないということではないだろうか。これはいじめに限らず、不登校の大きな要因の一つであるともいえる。p4cでは次の3点から、生徒指導上の課題解決につながると考える。

- ① ボールを持った人しか話せない。
 - みんながちゃんと聞いてくれる心地よさ、満足感。
- ② 「正解がない」から、否定されない。笑われぬ。
 - 成績や立場の優劣等に左右されない安心感。自己肯定感。
- ③ セーフティの確保が大前提。
 - よりよい人間関係の構築と、安心できる居場所づくり



コミュニティボール

(2) アクティブ・ラーニングのモデルとなり得る

現在策定中の新学習指導要領の目玉の一つに、アクティブ・ラーニングがある。これは「課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ」ものであり、まさしく p4c の教育方法と合致するものである。「最近の子どもたちは考えることをせず、すぐに正解を求めたがる」と評されることがある。社会に出れば正解は一つとは限らないし、見つからない場合だってある。正解を選ぶのではなく、正解を求めて考える姿勢こそ大切なのに、「選択肢がないと若者は固まってしまう」といった話も聞いたことがある。こうした状況の中で、p4cの持つ次の2つの特徴に期待が寄せられる。

- ① 「教師からの問い」ではなく、「子どもの問い」を大切にする。
 - 子どもがより主体的に学ぶことができる。
 - 課題を見つける力や探究心が高まる。
- ② 「対話による探究」という、学び方を経験する。
 - 協働的な学びを身に付けることができる。
 - 考えを整理し、簡潔に話せるようになる。
 - 考えが深まる楽しさを味わうことができる。
 - 課題を解決する力が育つ。



円座になったの活動風景

4 参考文献

- ① 教育現場における p4c 活用の可能性を探る (2015.3 本センター紀要 第3巻)
- ② 子どもの哲学 (p4c) の意義について ―クリティカル・シンキングとの比較を中心に― (2015.3 本センター紀要 第3巻)
- ③ 教科等の授業における p4c (子どもの哲学) 活用の可能性を探る (2016.3 本センター紀要 第4巻)
- ④ 子どもの哲学 (p4c) による超自我の覚醒―コミュニティ対話の現象的心理学― (2016.3 本センター紀要 第4巻)



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から5年を経て

VI 資料編

VI 資料編

1 教育復興支援センターだより (平成27年度)

教育復興支援センターだより

③ 第1回ボランティア協力員総会 (4月22日・水)

平成27年度第1回ボランティア協力員総会が開催された。中井センター長挨拶の後、2年生代表の佐々木太さんから、これまでの協力員や運営委員の活動紹介があった。その後、昨年11月に実施した石巻・女川児童の被災地視察研修に参加した学生から視察の報告があった。今年で1~4年生のボランティア協力員がそろった。協力員たちは、今後、運営委員を募って様々な活動を実施していく。




④ グリーンウェイブ2015に参加 (5月21日・木)

国連が定める国際生物多様性の日 (5月22日) の前日、世界各地の子どもたちが学校や地域などで植樹等を行うグリーンウェイブイベントとして参加した。今年は英語教育講座の先生からご寄付いただいたジャクマク・ポトスを植樹した。昨年植樹したブルーベリーも元気に育ち実をつけている。




⑤ 南相馬被災地視察研修 (6月6日・土)

南相馬市出身の学生を中心に、企画運営した被災地視察研修を実施。参加者は教職員もあつめ24名で福島の学生もあつた。小高区は日中の立ち入り制限されているため、事前でコンタクトが確保されていたが、一歩住宅街に足を踏み入れると人影は見られなかった。沿岸部の村上地区では、中地野蔵施設が整備されてきたためか、津波で破壊された家屋も撤去され、1年前と比べ少なくなっていた。




教育復興支援センターだより

⑥ 第17回復興カフェ in Miyako (3月9日・月)

ニュージーランド・オー克蘭ド大学のCarol Mutch准教授をお招きし、第17回復興カフェ in Miyakoを開催した。小中特准教授から教育復興支援センターの運営について説明があった後、震災後の復興状況や被災した子どもたちのケア、防災教育プログラム等、日本とニュージーランド双方の取組みを話し合い、有益な情報・意見交換が行われた。Carol准教授からは、震災に限らず、多岐にわたる分野におけるリーダーシップを養成するプログラムを、作成していることなどの報告があった。




⑦ 第3回国連防災世界会議仙台市にて開催された。期間中、本学主催の下記イベントが実施された。

- ・1月28日プレイベント・仙台市民会館やせんだいメディアでのブース展示
- ・仙台広域圏ESD・FCE運営委員会主催「東日本大震災と持続可能な防災シンポジウム」
- ・コミュニケーションスペースにおいて展示やプレゼンテーション
- ・東日本大震災・総合フォーラム
- ・「持続可能な開発のための教育を遂げた防災・減災の展開」
- ・復興大生主催パブリックフォーラム・学生主催の被災地バスツアー




総合フォーラム：パネルディスカッション 入場者数：1,100名

総合フォーラム：本学学生発表




復興大生：本学学生発表 せんだいメディアテーク：ブース展示 被災地バスツアー：釧路中学校前にて

教育復興支援センターだより

⑧ 第18回復興カフェ in Miyako (7月7日・火)

「東日本大震災を伝える」と題した復興カフェが開催され、山形県陸奥中より2年生31名・教員2名を含む45名が参加した。高校1年生が見た震災 (自録大知氏)、被災地の子と私たち (卒業生津田潤人氏)、その時中学生は (伊藤尚郎師範生教員) の3人の話聴き共有があった。中学生からは復興カフェ終了後、学内見学、秋明会館にて大学生と一緒に昼食を取った。




⑨ ボランティア不安解消会 (7月8日・水)

夏の学習支援ボランティア活動開始にあたり、ボランティア不安解消会が開催された。中井センター長の挨拶、ボランティア経験者からの話の後、当センターからの連絡事項の紹介があった。不安解消Q&Aも配布された。




⑩ 第19回復興カフェ in Miyako (7月14日・火)

本学の学部生向け科目「環境と開発」(担当教員・西城菜/小畑隆史)の一環として、「福島県震災後の地域社会の変化と課題」をテーマに実施したフィールド実習の報告をかねた復興カフェが開催された。学生たちは3グループにわかれ一人ずつプレゼンを行った。




教育復興支援センターだより

⑪ 共催：ネパール地震災害緊急報告会 (6月11日・木)

日本地すべり学会、東北地理学会、東北大学災害科学国際研究所、本センター共催の標記報告会『ネパール地震災害調査報告—斜面災害を中心に—』を開催した。八木浩司・山形大学地域教育文化学部教授を講師にお迎えし、5月19日~6月2日に実施したネパール地域の調査をご報告頂いた。会場(東北大学災害科学国際研究所)と本センターをTV会議(右画像)・iPadと携帯電話にて中継、教職員が参加した。



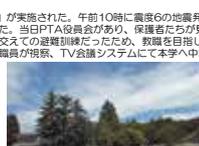

⑫ 被災地視察ツアー in 気仙沼 & 南三陸 (6月20日・土)

気仙沼や南三陸出身の学生による被災地視察研修を開催した。東日本大震災の津波によって壊滅的な被害を受け、「震災遺構」としてたびたび取り上げられる「気仙沼洋高校」や「南三陸町防災対策庁舎」を実際に見学し、参加した学生たちは言葉がでない様子だった。




⑬ 附属3校連合同防災訓練 (6月29日・月)

本学附属3校園にて「上杉キャンパス合同避難訓練」が実施された。午前10時に震度6の地震発生、小学校給食室より火災発生を想定して避難が開始された。当日PTA役員会があり、保護者たちが見守るなかでの避難訓練であった。教育実習中の本学学生も又受ての避難訓練だったため、教職を自覚している学生にとって良い経験となった。当センターより教職員が視察、TV会議システムにて本学へ中継した。

教育復興支援センターより

④ 平成27年度 夏期期間中のボランティア一覧

毎年恒例！ボランティアの夏！現在、暑熱中の被災地復興ボランティアです！

被災地での活動の様子や、ボランティアの活躍の様子を、ぜひご覧ください！

No.	学校名(漢字)	人数	活動期間	活動内容	備考	活動日
1	仙台市立角田小学校	5	7月13日	2日連続	学習支援活動	7月13日
2	仙台市立角田小学校	5	7月14日	2日連続	学習支援活動	7月14日
3	仙台市立上郷中学校	5	7月13日	2日連続	学習支援活動	7月13日
4	大崎中学校	3	7月13日	2日連続	学習支援(英語)	7月13日
5	仙台市内中学校	3	7月13日	2日連続	学習支援活動	7月13日
6	仙台市立大森中学校	3	7月13日	2日連続	学習支援活動	7月13日
7	仙台市立大森中学校	3	7月14日	2日連続	学習支援活動	7月14日
8	仙台市立大森中学校	3	7月15日	2日連続	学習支援活動	7月15日
9	仙台市立大森中学校	3	7月16日	2日連続	学習支援活動	7月16日
10	仙台市立大森中学校	3	7月17日	2日連続	学習支援活動	7月17日
11	仙台市立大森中学校	3	7月18日	2日連続	学習支援活動	7月18日
12	仙台市立大森中学校	3	7月19日	2日連続	学習支援活動	7月19日
13	仙台市立大森中学校	3	7月20日	2日連続	学習支援活動	7月20日
14	仙台市立大森中学校	3	7月21日	2日連続	学習支援活動	7月21日
15	仙台市立大森中学校	3	7月22日	2日連続	学習支援活動	7月22日
16	仙台市立大森中学校	3	7月23日	2日連続	学習支援活動	7月23日
17	仙台市立大森中学校	3	7月24日	2日連続	学習支援活動	7月24日
18	仙台市立大森中学校	3	7月25日	2日連続	学習支援活動	7月25日
19	仙台市立大森中学校	3	7月26日	2日連続	学習支援活動	7月26日
20	仙台市立大森中学校	3	7月27日	2日連続	学習支援活動	7月27日
21	仙台市立大森中学校	3	7月28日	2日連続	学習支援活動	7月28日
22	仙台市立大森中学校	3	7月29日	2日連続	学習支援活動	7月29日
23	仙台市立大森中学校	3	7月30日	2日連続	学習支援活動	7月30日
24	仙台市立大森中学校	3	7月31日	2日連続	学習支援活動	7月31日
25	仙台市立大森中学校	3	8月1日	2日連続	学習支援活動	8月1日
26	仙台市立大森中学校	3	8月2日	2日連続	学習支援活動	8月2日
27	仙台市立大森中学校	3	8月3日	2日連続	学習支援活動	8月3日
28	仙台市立大森中学校	3	8月4日	2日連続	学習支援活動	8月4日
29	仙台市立大森中学校	3	8月5日	2日連続	学習支援活動	8月5日
30	仙台市立大森中学校	3	8月6日	2日連続	学習支援活動	8月6日
31	仙台市立大森中学校	3	8月7日	2日連続	学習支援活動	8月7日
32	仙台市立大森中学校	3	8月8日	2日連続	学習支援活動	8月8日
33	仙台市立大森中学校	3	8月9日	2日連続	学習支援活動	8月9日
34	仙台市立大森中学校	3	8月10日	2日連続	学習支援活動	8月10日
35	仙台市立大森中学校	3	8月11日	2日連続	学習支援活動	8月11日
36	仙台市立大森中学校	3	8月12日	2日連続	学習支援活動	8月12日
37	仙台市立大森中学校	3	8月13日	2日連続	学習支援活動	8月13日
38	仙台市立大森中学校	3	8月14日	2日連続	学習支援活動	8月14日
39	仙台市立大森中学校	3	8月15日	2日連続	学習支援活動	8月15日
40	仙台市立大森中学校	3	8月16日	2日連続	学習支援活動	8月16日
41	仙台市立大森中学校	3	8月17日	2日連続	学習支援活動	8月17日
42	仙台市立大森中学校	3	8月18日	2日連続	学習支援活動	8月18日
43	仙台市立大森中学校	3	8月19日	2日連続	学習支援活動	8月19日
44	仙台市立大森中学校	3	8月20日	2日連続	学習支援活動	8月20日
45	仙台市立大森中学校	3	8月21日	2日連続	学習支援活動	8月21日
46	仙台市立大森中学校	3	8月22日	2日連続	学習支援活動	8月22日
47	仙台市立大森中学校	3	8月23日	2日連続	学習支援活動	8月23日
48	仙台市立大森中学校	3	8月24日	2日連続	学習支援活動	8月24日
49	仙台市立大森中学校	3	8月25日	2日連続	学習支援活動	8月25日
50	仙台市立大森中学校	3	8月26日	2日連続	学習支援活動	8月26日
51	仙台市立大森中学校	3	8月27日	2日連続	学習支援活動	8月27日
52	仙台市立大森中学校	3	8月28日	2日連続	学習支援活動	8月28日
53	仙台市立大森中学校	3	8月29日	2日連続	学習支援活動	8月29日
54	仙台市立大森中学校	3	8月30日	2日連続	学習支援活動	8月30日
55	仙台市立大森中学校	3	8月31日	2日連続	学習支援活動	8月31日

毎年恒例！ボランティアの夏！現在、暑熱中の被災地復興ボランティアです！

被災地での活動の様子や、ボランティアの活躍の様子を、ぜひご覧ください！

教育復興支援センターだより
24号
15.11.15

① 防災教育研修会・大崎市 (7月28日・火)

大崎市立迎部小学校『防災教育の研修会』において、小田隆史准教授が講話とワークショップの講師を担当した。夏休みにPTAで子どもたちとハザードマップづくりを行うための研修会ということもあって、暑い体育館で皆様一生懸命取り組んでいた。小学校5年生のお子さんもグループ代表で発表した。



② オープンキャンパス (7月31日・金)

ボランティア協力員たちが、オープンキャンパスで本学を訪れた高校生たちに、教育復興支援センターの取り組みを説明した。青葉山の住人(やぎの"つよし")も歓迎のパフォーマンス。大喜びの高校生たちだった。



③ 第20回復興カフェ in Miyako (8月24日・月)

第20回復興カフェでは、愛知教育大学の学生3名と学習支援ボランティア活動や被災地視察について意見交換を行った。今回、愛知教育大学から参加した学生3名(市川真基氏、伊藤喜之氏、中島忠氏)は、本学学生(佐々木美太氏、濱田加奈氏)とともに、個人的に被災地視察を実施し、その帰途に当センターにて、見上学長、中井センター長等と懇談した。学生からは被災地と繋がってほしい、情報発信・共有をしたい、感じたことを伝えていきたいなどの意見があった。



8月14日、学習支援ボランティア活動終了後、被災してきた愛知教育大学の学生たち

教育復興支援センターより

⑤ JICA集団研修 被災地視察研修会 (10月12日・月)

JICA研修コース「教員養成課程における方法と技術」の研修生を対象に、被災地視察研修を実施した。JICA関係者と教育復興支援センター特任教授の16名で、仙台平野で津波被害を受けた仙台市立荒浜小学校と名取市立上郷中学校、高い津波が押し寄せたアス海岸の女川町を視察した。参加者たちは荒浜小学校の視察では、避難者が救出されるまでの校長の対応や、平野部での避難の困難さに関心を示していた。聞上中学校の校舎を見た後、日和山や犠牲になった生徒の慰霊碑を訪れたが、犠牲の大きさに言葉を失っていた。



聞上中学生の慰霊碑に訪れる研修生
女川町の2階にて

⑥ JENESYS2015 招へいプログラム研修生との交流 (10月15日・木)

外務省主催のASEANGが企画し東ティモールを対象とした若者招へいプログラム「JENESYS2015」により、来日中の学生等(約40名)が本学を訪れた。午前中、市瀬教授の授業にて本学学生と交流、午後は、東日本大震災被災地を視察した。(本学学生3名が英語で仙台荒浜・名取聞上などを案内した)



⑦ 第44回宮城教育大学学祭 (10月24日・土~25日・日)

第44回学祭において教育復興支援センターでは、教育復興支援ボランティア協力員(大学祭担当)たち手作りの活動年表やボランティア活動のポスターや、東北地域づくり協会のパネルも展示した。



教育復興支援センターより

⑧ 仙台市立荒浜小学校運動会 (9月5日・日)

小雨降る中、開校140周年記念「ふるさと荒浜学区長大運動会」が7歳小学校にて開催された。児童(1年、2年、5年生)16名と約200人の町内会や保護者、学校関係者が参加し、荒浜小学校最後の運動会となった。児童全員の短距離走では、一人一人決意表明がなされ、最後の演技『みんなで踊ろう!』では、参加者全員が輪になり、アンコールが繰り返されるほどの盛り上がりを見せた。関係者からの寄付による【くじ引き屋さん(担当:本学ボランティア学生)】も大盛況だった。



⑨ 第三回公開集會 宮城教育大学防災ウィークエンド (9月13日・日)

本学学生(4名)が、「学習支援ボランティア活動報告/被災地視察研修企画への思い」について発表した。福島出身の学生からは、様々な災害が起こったので、防災教育が進んでいると思われているが、集落が分散、失われた町なのでそれとどこではない、大学で学んだことを福島で実践したい等の報告があった。参加者アンケートでは、「学生の生の声の心に響き、救がでてきた」となどの感想が寄せられた。また、「宮城県北部の大雨災害調査報告」(日本地理学会災害対策委員会HP.9.13)も掲示した。



「宮城県北部の大雨災害調査報告」パネル

⑩ 仙台市立中野小学校運動会 (10月3日・土)

平成27年10月3日(土)秋晴れの中、41回目の「中野小学校区長大運動会」が開催された。最後の運動会を惜しむかのように、40名の児童とたくさん地域のの方々による演技が繰り広げられた。学生たちも、津波の手紙の台詞を繰って一人一人の名前を呼びながら懸命に声援を送っていた。



教育復興支援センターだより

④ 第22回拡大復興カフェ in Miyako (11月26日・水)

雨の降る寒い中、復興教育学創設室 キャンプ炊き出しプロジェクト担当の拡大復興カフェが開催された。11月24日に炊き出し研修の練習を行い、当日は、30分で作る味噌パン・～3缶オーブンピザ・ポリ袋ご飯、麻製チーズなどが振舞われた。会場が、本学の中間だったため、お昼休みの学生たちで賑わった。当センター職員は焼製チーズ作りを担当した。(当日の気象情報：12:40現在 気温7度 湿度98% 気圧1004hPa 時間雨量 1.0mm)



⑤ 第2回ボランティア協力員総会 (1月20日・水)

平成28年度においてもボランティア協力員を募集することになり、中井センター長より現1年生に募集の協力依頼が行われた。被災地視察・大学祭・学習支援ボランティア活動報告の後、初代代表より「目の力が合わさればもっとも大きなことができる。勉強も継続しながら、やらなければいけないこと、何をすべきか考えながら行動することが大事」とのエールを受け、来年度代表から「1人の力では何もできないが、集まれば大きなことができる。力を貸して下さい」との挨拶があった。



初代 代表



1年生 代表

⑥ 防災教育を中心とした学校安全フォーラム (1月22日・金) 【後援事業】

宮城県教育委員会、東北大学災害科学国際研究所防災教育国際協働センター主催、本センター後援の標記フォーラムが、岩沼市民会館にて開催された。午前の部「未来をひらく地域に根差した安全教育～」では、基調講演とパネルディスカッションが行われた。午後の部「未来へつなぐ防災教育」において、本センター小田村主任教授が、「トミームリア・ハッサインドネシアアチャ津波博物館の特別講演「アチャにおける津波アーカイブと教育への活用」の逐次通訳を行った。



教育復興支援センターだより



25号
'16.3.2

① 第21回復興カフェ in Miyako (10月28日・水)

第21回では本学教職会館にて、サイエンスインストラクター・防災キャスターの阿部清人氏に『防サイエンスショー楽しく科学・伝える防災』と題した防災に役立つことならについて、化学実験を交えてお話しいただいた。量食時ということもあって約100名が防災教育の新しい手法を体験した。



② 仙台市立中野小学校学芸会 (10月31日・土)

今年度で閉校となる中野小学校の最後の学芸会に、本学学生7名が運営補助ボランティアとして参加した。事前準備から、児童生徒の介助、照明、物品の運搬等を本学学生たちがサポートし、劇や合唱で大盛況となる思い出深い学芸会となった。学芸会の途中で校長先生からボランティア学生たちの紹介があった。



③ 石巻支援学校学習発表会 (10月31日・土)

穏やかな天候のもと、障害のある児童生徒たちが、日々練習を重ねてきた成果を発表した。ボランティア活動に参加した学生は本学生3名を含め18名。受付・案内、会場準備、児童生徒対応等の係を預めるほか、石巻好文館高校の先輩・後輩の交流もあった。



教育復興支援センターだより

⑦ 第23回復興カフェ in Miyako (2月17日・水)

今回は、小田村主任教授と藤原忠和主任が教育復興支援センターの活動を英語（日本語補足付）で発表した。藤原主任からは当センターの設立経緯、現在の活動、センターの今後など、小田主任教授からは海外の震災・防災教育などのプレゼンがあった。参加者から英語での質問もあり、貴重な復興カフェとなった。



★皆様のご参加をお待ちしています。

教育復興支援センター メモリアルイベント ご案内

2016年3月9日(水)～3月14日(月)
【震災から5年 私たちはあの日を忘れない】

目的： 震災から5年目の節目にあたり、東日本大震災を忘れないため、被災地視察研修やメモリアルフォーラムなどを開催する。

日程：

3月9日(水) 被災地視察研修(石巻市立大川小学校)

8:00宮教大発～17:00宮教大着

3月10日(木) 被災地視察研修(仙台近郊・午後出発)

13:00宮教大発～17:00宮教大着

3月11日(金) メモリアルフォーラム

場所：教職会館2F交流・談話スペース

時間：12:00～17:00

内容：・「あの日を忘れない～そなえも忘れない～」炊きだしプロジェクト

・復興支援ボランティア学生のお話(愛知教育大学学生を連れて)

・追悼式典テレビ中継

・14:46 黙祷

・懇談会「活動を振り返ろう」(センター特任教授からの話を含む)

3月14日(月) 仙台市立七郷中学校野球部生徒紅白試合(本学グラウンド)

10:30～トレーニング

13:00～感謝の会

13:30～紅白試合

問い合わせ先 022-214-3296
Eメール fukkou@adm.miyako-u.ac.jp



2 刊行物

1 教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために」(第4集)

仙台市小学校長会

仙台市内小・中学校の震災から学ぶ教育や復興をめざすさまざまな教育実践は、本学との連携を通して教育復興実践事例集（第1集～第3集）にまとめられ、防災教育のカリキュラムの範例として各方面から高い評価をいただいている。

今年度は、仙台市小学校長会が、宮城教育大学教育復興支援センター（学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業）と連携協力のもと、各学校で取り組んださまざまな実践をまとめた「明日の子どもたちのために 一教育復興実践事例集 第4集」を発刊した。第4集の特徴は、大震災から5年目に震災を風化させない取組、各校長の学校経営、被災校6校の今、防災モデル校の取組などこれまでの括りに加えて、平成27年3月に仙台で開催された国連防災世界会議での防災授業や実践発表、さらに震災時の管理職の対応の記録を取り上げたことである。

震災の記憶を風化させることなく、各学校の取組を記録し、その歩みを共有することは、明日を生きる子どもたちにたくましく生き抜く力を育む、新たな教育の推進につながるものである。

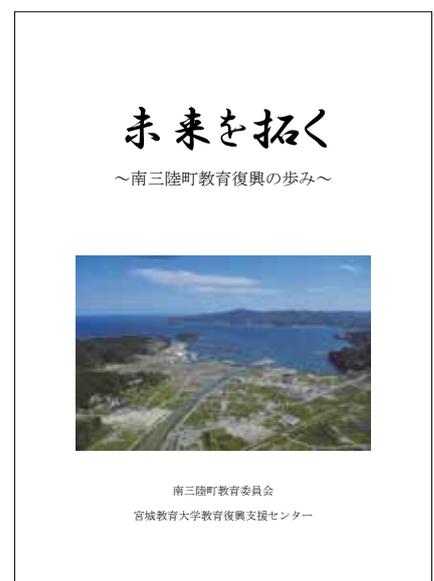


2 「未来を拓く～南三陸町教育復興の歩み」

南三陸町教育委員会

南三陸町は、今回の震災により沿岸部を中心に甚大な被害を受けている。多くの家屋が、巨大津波により流失し、教育関係機関にも大きな影響を及ぼしている。直接校舎まで津波が押し寄せた学校もあり、発災当時は、同町内の学校はもとより他市の施設を借用した教育活動を行った学校もあった。その後の5年間、校舎改修により元の学校で教育活動を再開できたところもあれば、新たな地に校舎を新築した学校もあり、また閉校となったところなどさまざまな教育復興の歩みがなされてきた。

発刊された「未来を拓く～南三陸町教育復興の歩み～」には、町内の5つの小学校と3つの中学校の児童生徒と教職員、そして地域の方々との困難に満ちた避難活動やその後の避難所運営の様子が記されている。さらには、学校再開のための教職員の創意工夫、今日に至るまでの学校と教育委員会の連携による復興の歩みがまとめられている。



3 教育復興支援センター「紀要」(第4集)

1	<p>小金澤 孝昭: 復興教育によるグローバル人材の育成 ~大学生教育でのESD・アクティブラーニングを事例に~</p> <p>Takaaki KOGANEZAWA: Learning program for Global human By Education for Sustainable Development A Case Study about ESD Program and Active Learning for University Students</p>	
2	<p>田端 健人: 子どもの哲学(p4c)による超自我の覚醒 コミュニティ対話の現象学的心理学</p> <p>Taketo TABATA: The Metaself Awakens in the philosophy for children (p4c) The Phenomenological Psychology of the Community Dialogue</p>	
3	<p>黒川 修行・佐藤 洋: 東日本大震災後の子ども達の体格の変化について(平成22年度~平成26年度)</p> <p>Naoyuki KUROKAWA and Hiroshi SATOH: Change of body physique in school children in Sendai, Japan after the Great East Japan Earthquake, 2010-2014</p>	
4	<p>野澤 令照: 市民協働により復興を支える宮城教育大学の新たな取組 Vol.2 コミュニティ再生を目指す新たな活動を通して</p> <p>Yoshiteru NOZAWA: New Actions Take by Miyagi University of Education Supporting Recovery from Disaster through Citizens Collaboration: new activities aiming for community rebuilding vol.2</p>	
5	<p>小田 隆史: 教育セクターでの国際防災協力の展開可能性 -アジア工科大学短期研究滞在の経験から-</p> <p>Takashi ODA: Fostering International Cooperation in the Education Sector for Disaster Risk Reduction: From an Academic Exchange at the Asian Institute of Technology</p>	
6	<p>門脇 啓一・吉田利弘・伊藤芳郎・藤原忠和: 支援実践部門報告 学習支援ボランティア活動等を通じた学生の育成</p> <p>Keiichi KADOWAKI, Toshihiro YOSHIDA, Yoshiro ITO and Tadakazu FUJIWARA: Training Students through Volunteer Activities</p>	
7	<p>庄子 修・堀越清治: 教科等の授業におけるp4c(子どもの哲学)活用の可能性を探る</p> <p>Osamu SHOJI, Seiji HORIKOSHI: Seeking the Application of p4c in Subjects</p>	
8	<p>Alison NEMOTO: Supporting Post-Disaster Community Resettlement: Some perceived short-term and long-term effects of the "Nashi No Hana Volunteer Project" (2012-2016)</p>	
9	<p>西城 潔・小田 隆史: 復興カフェを利用した被災地巡検報告 -現代的課題科目「環境と開発」での取り組み-</p> <p>Kiyoshi SAIJO and Takashi ODA: Active learning in a Disaster-Affected Area from the 2011 Great East Japan Earthquake: A Case from "Environment & Development," a University Field Excursion Course in Iwaki City, Fukushima Prefecture</p>	
10	<p>水谷 好成・小野寺 泰子・鶴川 義弘・福井 恵子・小田 隆史: 雨天に対応できる防災・炊き出し研修</p> <p>Yoshinari MIZUTANI, Taiko ONODERA, Yoshihiro UGAWA, Keiko FUKUI and Takashi ODA: Outdoor Food Distribution Drill for Emergency Shelter Operation Applicable under Rainy Weather</p>	
11	<p>小野寺 泰子・水谷 好成・福井 恵子・鶴川 義弘: 炊き出し研修で簡単にできる調理メニューの提案</p> <p>Taiko ONODERA, Yoshinari MIZUTANI, Keiko FUKUI, and Yoshihiro UGAWA: Proposal of easy soup kitchen menu for Outdoor Food Distribution Drill</p>	
12	<p>香曾我部 琢: 家庭科教育が震災後の教育復興に果たした役割とは - 震災を単元に取り入れた家庭科授業実践のKJ法を用いたレビュー -</p> <p>Taku KOUSOKABE: The Meaning of Home Economics Education in Disaster Education</p>	
13	<p>小田 隆史・竹内 治: 身近な地域の自然と歴史に親しむ防災ワークショップ - 宮城県大崎市立沼部小学校における実践事例から -</p> <p>Takashi ODA and Osamu TAKEUCHI: Workshop for Disaster Risk Reduction through Gaining Knowledge of the Local Natural Environment and Historical Legacy at Numabe Elementary School, Osaki, Miyagi, Japan</p>	

4 故郷復興プロジェクト視聴DVD「ともに、前へ」(第2巻、第3巻)

仙台市中学校校長会

本DVDは、昨年度仙台市中学校長会と連携して刊行した第1巻に引き続き、第2巻、第3巻として刊行したものである。仙台市教育委員会の復興に向けた取組の一つである故郷復興プロジェクトの中で行われる全校集会などで視聴できるものとして作製した。

第1巻の内容である東日本大震災の発生時の状況や学校の被害状況、新しい防災教育など学

校の活動の様子を踏まえ、第2巻は「つながりあう心と未来への希望」、第3巻は「震災の総括と未来に向けた使命」をテーマに、震災や復興の記憶の風化を防ぐとともに、仙台市内中学生がこれからも希望と自信を持って復興への歩みを進められるよう、各学校の具体的な取組や支援者のメッセージなどを各巻10数分にまとめたものである。



3 外部資金等

本学が被災地仙台にあり教員養成教育に責任を負う大学として、東日本大震災により甚大な被害をこうむった被災地域への中・長期的な教育的支援を重点的に取り組むため、各種外部資金獲得の申請を行った。

1 文部科学省大学改革推進等補助金

大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業

補助金額：46,075 千円

事業の目的・必要性

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災により、宮城県は生活全般にわたり極めて甚大な被害をこうむり、被災地では未だ避難生活も続いている状況である。しかし、震災からの本格的な復興に向けて自治体を中心に様々な活動が動き出している中、被災地仙台にあり教員養成教育に責任を負う大学として、被災地への中・長期的な教育的支援を重点的に取り組むため、その中核的な学内組織「宮城教育大学教育復興支援センター」を立ち上げ、宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会との連携のもと、宮城県の教育の復興、発展をめざすとともに、地域に密着した現職教員支援及び教員養成実践教育を行うものである。

被災地の学校では、学力低下・学力格差が懸念されている。

- ①教室復旧過程における児童・生徒の学習意欲・態度，集中力，学習達成度における課題の明確化
- ②避難所生活や仮設住宅生活等の家庭環境の変化が与える子どもへの影響
- ③転校を余儀なくされ，離ればなれになった児童・生徒の心的ストレス
- ④家族を失った児童・生徒の癒されない気持ちの潜在化

しかしながら、これら困難な諸課題に向き合っている教職員は疲労が蓄積しており、日々進行する被災の現状認識に伴う心的ストレスの増加、問題をもった児童・生徒に対する心のケアを含む教育の方法に関する知識不足などから、適切な教育環境が確保されておらず、教育復興への大きな障壁となっている上、これらは短期間で解決できる課題ではないものである。

本学が被災地域の一日も早い復興のためにできることを考えたとき、中・長期的な教育的支援という視点に基づいた本事業を実施することにより、宮城県の教育復興を図る取組の一つとして寄与するものである。さらに、教員をめざす学生が被災地域に赴き、困難な生活に立ち向かう児童・生徒や教職員と触れ合いながら勉学を教えたり教育活動に携わることは、今後の教員生活に必須となる人間力や教育実践力の向上のための貴重な財産となり得るものである。

② 文部科学省「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」

受託金額：32,640 千円

事業の趣旨

東日本大震災から4年が過ぎ、復興が進む一方で先が見えがたい現実に、仮設住宅や見なし仮設住宅に疲労感や焦燥感が広がってきており、地域コミュニティの再生・復興がままならない中、被災直後とは変化した地域課題が生じてきている。本事業は、そういった課題への対応策を一過性のものとせず、今後の被災地の自律的な復興が長く地域コミュニティに根ざす仕組みづくりを実現するため、産・官・学が連携して以下の事業に取り組むこととした。

- ・地域における活動を担う人材の育成
- ・人と人とのつながりを再生する学びの事業の推進
- ・学校と地域とが協働で取り組む防災教育の創造と実践
- ・コミュニティ再生を支える地域連携組織の構築



具体的な取り組み内容

主な事業として、広く地域一般市民に防災や復興に関する多種多様な講座を提供した「宮教大防災 Weekend」、震災犠牲者の鎮魂と被災者の心の支援・地域再生支援を趣旨とした復興支援コンサート「音楽の花」、被災地ではたらく先輩の話を聞き、未来を考える高校生キャリア教育講座などを開催した。

③ 公益財団法人 上廣倫理財団

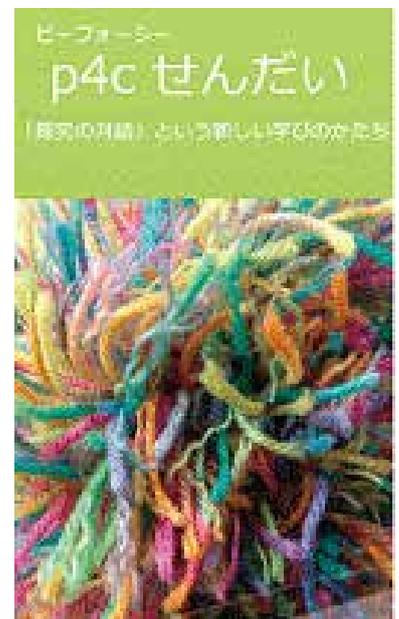
プロジェクト研究助成〈p4c せんだい推進プロジェクト〉

寄附金額：9,000 千円

事業の概要

人間の倫理観の育成・教育に関わる研究及び活動への助成を行っている当該財団より、被災地における「命の教育」「生き方教育」に寄与する p4c (philosophy for children: 子どもの哲学) 推進への支援をいただいた。大学研究者、学校、企業人など幅広い委員で構成した実行委員会を核に、研究、実践を積み重ねてきた。

震災により発生した家庭や地域環境の激変は、児童生徒の学習意欲の低下や心的ストレス、体力低下など大きな課題をもたらしただけでなく、人生観や価値観を大きく揺るがす状況を生み出し



た。復旧復興の過程において、さらに根源的な問題が発生してくることが予見されるが、その解決へ導くプログラムとして p4c のプログラムに着目し、下記のような研修・実践・研究の活動を行うこととした。

従来の大学と教育委員会、学校との連携に留まらず、広く地域や企業なども巻き込んで、児童生徒の考える力やコミュニケーション力、想像力の高揚をめざす取り組みを展開する。また、その成果を学生及び地域にも波及させ、p4c が教育復興の一翼を担えるよう強力に推進する。

4 公益財団法人 ベルマーク教育助成財団

ベルマーク教育助成財団寄附金

寄附金額：500 千円（平成 27 年度より 3 年間）

事業の概要

「すべての子どもに等しく、豊かな環境のなかで教育を受けさせたい。」というベルマーク運動を推進し、集めた資金（ベルマーク預金）で学校の設備や教材をそろえ、さらに国の内外でハンディを背負いながら学んでいる子どもたちに援助の手を差し伸べる活動を行ってきた。これまで財団が行ってきた援助は、へき地学校、特別支援学校、災害被災校を含む多くの学校、さらには、病院内学級、海外にある日本人学校、海外被災地への援助など多岐に渡っている。

今回、本学が教育復興支援センターを拠点に、被災地の復興支援に取組み成果を残してきたことが認められて、活動への援助をいただけることになった。

東日本大震災から 5 年を経てもなお支援を必要とする被災地の子どもたちや教育環境を改善するために、今後の教育復興活動に有効に活用させていただく考えである。

4 平成27年度教育復興支援センター活動(事業)実績一覧

		実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学	備考
1	継続	仙台市立荒浜小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	2			②教員補助事業
2	継続	仙台市立蒲町中学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	4			②教員補助事業
3	継続	女川小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	4			②教員補助事業
4	継続	岩沼市立玉浦中学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	11			②教員補助事業
5	継続	宮城県美田園高等学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	5			②教員補助事業
6	4月22日	宮城教育大学	第1回学生協力員総会	44			人材育成
7	5月20日	宮城県立利府支援学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	1			②教員補助事業
8	5月23日	宮城県立石巻支援学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	3			②教員補助事業
9	6月6日	旧山元町立中浜小学校 他	第20回被災地視察研修	24			人材育成
10	6月14日	仙台市縄文の森広場	こども☆ひかりフェスティバルの補助	13			④こども対象・参加イベント
11	6月20日	気仙沼・南三陸方面	第21回被災地視察研修	27			人材育成
12	7月6日	東松島市コミュニティーセンター	「ハザードマップの作り方」「防災教育の必要性」	派遣	32		③教員研修等事業
13	7月7日	宮城教育大学	第18回復興カフェ	45			研究開発事業
14	7月8日	宮城教育大学	夏休みボランティア不安解消会	15			人材育成
15	7月14日	宮城教育大学	第19回復興カフェ	19			研究開発事業
16	7月27日	蔵王町役場	蔵王町教職員研修会～志教育と学力向上について～	派遣	50		③教員研修等事業
17	7月28日	大崎市立沼部小学校	「ハザードマップの作り方」「防災教育の必要性」	派遣	40		③教員研修等事業
18	7/30～7/31	大和町立宮床中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	2	4		①教育復興支援塾事業
19	8月1日	仙台市立西山中学校	女川町民を対象とした交流イベント	2			④こども対象・参加イベント
20	8/3～8/7	名取市立開上中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	12	(5)	40 (25)	愛知教育大学 ①教育復興支援塾事業
21	8/3～8/7	登米市立南方中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	14	(11)	65 (55)	京都教育大学、大阪教育大学 ①教育復興支援塾事業
22	8/3～8/7	大河原町立金ヶ瀬中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	1	4		①教育復興支援塾事業
23	8/3～8/7	大河原町立大河原中学校①	自学自習支援(中1～3年生対象)	2	7		①教育復興支援塾事業
24	8/3～8/7	岩沼市内小中学校①	自学自習支援	7	19		①教育復興支援塾事業
25	8/3～8/7	大崎市立古川中学校	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	2	5		①教育復興支援塾事業
26	8/4～8/7	丸森町立丸森中学校	自学自習支援(5教科:中1～3年生対象)	5	(2)	17 (8)	奈良教育大学 ①教育復興支援塾事業
27	8/4～8/7	亘理町内小中学校①	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	3	9		①教育復興支援塾事業
28	8月11日	東京エレクトロンホール宮城	田端健人教授/こころの復興フォーラム	—			⑤心のケア事業

		実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)		派遣延人数 (他大学内数)		協力・連携大学	備考
29	8/16～8/20	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科、教材作成・指導を含む)	16		60			①教育復興支援塾事業
30	8/17～8/21	大河原町立大河原中学校②	自学自習支援(中1～3年生対象)	1		4			①教育復興支援塾事業
31	8/17～8/21	色麻学園	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	2		8			①教育復興支援塾事業
32	8/17～8/21	大崎市立鹿島台中学校	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	1		4			①教育復興支援塾事業
33	8/17～8/21	富谷町立富谷中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	7	(1)	24	(2)	東北学院大学	①教育復興支援塾事業
34	8/17～8/21	大郷町立大郷小・中学校	サマースクール講師・自学自習支援	9		23			①教育復興支援塾事業
35	8/17～8/21	塩釜市内2中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	4		17			①教育復興支援塾事業
36	8/17～8/21	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援	10	(6)	47	(30)	東京学芸大学	②教員補助事業
37	8/18～8/19	仙台市立蒲町中学校	自学自習支援(5教科:中1～3年生対象)	2		3			①教育復興支援塾事業
38	8/18～8/20	角田市内小学校①	自学自習支援	1		2			①教育復興支援塾事業
39	8/18～8/20	亶理町内小中学校②	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	3		8			①教育復興支援塾事業
40	8/18～8/21	岩沼市内小中学校②	自学自習支援	1		4			①教育復興支援塾事業
41	8/18～8/21	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	15	(9)	58	(35)	福岡教育大学、早稲田大学	①教育復興支援塾事業
42	8/20～8/21	女川地区小・中学校および仮設住宅	自学自習支援(小学生及び中学生対象)	7		14			①教育復興支援塾事業
43	8/20～22	栗原市文化会館・教育研究センター	自学自習支援(小学生版「くりはら塾」での講師)	14		33			①教育復興支援塾事業
44	8月22日	TKP新宿ビジネスセンター	関東圏同窓生ネットワーク総会	共催		16			③教員研修等事業
45	8月24日	宮城教育大学	第20回復興カフェ	13					研究開発事業
46	8/24～8/25	角田市内小学校②	自学自習支援	8		16			①教育復興支援塾事業
47	8/24～8/25	柴田町立船岡小学校	自学自習支援	1		2			①教育復興支援塾事業
48	9/1～9/4	南三陸町立志津川中学校	教員補助	14	(12)	56	(48)	愛知教育大学、奈良教育大学、群馬大学	②教員補助事業
49	9/1～9/4	南三陸町立名足小学校	教員補助	6		24			②教員補助事業
50	9月3日	仙台市福祉プラザ	仙台市地域保健福祉計画の策定過程におけるワークショップ～復興過程における支え合い活動の経験を、これからの活動に活かすために～	派遣		25			③教員研修等事業
51	9月4日	仙台市教育センター	仙台市小学校長会研究協議会～世界が目にする仙台の防災実践、国連防災戦略「仙台防災枠組み2015-2030」採択地として～	派遣		124			③教員研修等事業
52	9/5～9/6	仙台市立荒浜小学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	7		12			②教員補助事業
53	9/16～9/19	福島県会津若松市(大熊幼稚園、大熊小・中学校)	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	13		52			②教員補助事業
54	9/24～9/25	丸森町内小学校	教員補助	6		10			②教員補助事業
55	10月3日	仙台市立中野小学校	運動会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	5		5			②教員補助事業

東日本大震災

		実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学	備考
56	10月28日	宮城教育大学	第21回復興カフェ	100			研究開発事業
57	10月30日	大崎市立沼部小学校	防災教育の公開授業の指導	派遣	50		③教員研修等事業
58	10月31日	宮城県立石巻支援学校	学校祭の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	3	3		②教員補助事業
59	10月31日	仙台市立中野小学校	学芸会の準備・運営補助、児童生徒への活動補助	7	7		②教員補助事業
60	11月21日	東六郷小学校	東六郷小学校学校祭での演奏披露	5			④こども対象・参加イベント
61	11月26日	宮城教育大学	第22回復興カフェ	129			研究開発事業
62	11月28日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	7			④こども対象・参加イベント
63	12月17日	仙台市立寺岡小学校	野澤副センター長/ キャリア教育の底力～東日本大震災を経験して見えてきたこと～				⑥こころざし・キャリア教育事業
64	12/24～12/25	大和町立宮床中学校	自学自習支援	1	1		①教育復興支援塾事業
65	12月25日	大郷町立大郷小学校	自学自習支援	4	4		①教育復興支援塾事業
66	12/25～12/27	栗原市文化会館・教育研究センター	自学自習支援(小学生版「くりはら塾」での講師)	13	23		①教育復興支援塾事業
67	12/25～12/27	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科、教材作成・指導を含む)	15	26		①教育復興支援塾事業
68	12/25～12/27 1/5～1/7	岩沼学び塾	自学自習支援(中学生対象)	8	14		①教育復興支援塾事業
69	1/4～1/6	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援	11	29		①教育復興支援塾事業
70	1/5・6 1/16・17	柴田町立船岡中学校	自学自習支援	3	8		①教育復興支援塾事業
71	1月20日	宮城教育大学	第2回学生協力員総会	18			人材育成
72	1月26日	八戸市立小中野公民館	学校・家庭・地域の絆がはぐくむキャリア教育				⑥こころざし・キャリア教育事業
73	1月27日	宮城県気仙沼合同庁舎	学力向上フォーラムin南三陸	-			⑤心のケア事業
74	2/15～2/19	福島県会津若松市(大熊幼稚園、大熊小・中学校)	教員補助	22	88		②教員補助事業
75	2月17日	宮城教育大学	第23回復興カフェ	15			研究開発事業
76	3月9日	大川小学校～女川地域医療センター～石巻市立門脇小学校	第22回被災地視察研修	13			人材育成
77	3月10日	仙台市荒浜・名取市関上方面	第23回被災地視察研修	29			人材育成
78	3月19日	仙台市立東六郷小学校	卒業式での音楽指導ボランティア	2			④こども対象・参加イベント

「これまで」そして「これから」 5年間の活動を振り返って

東日本大震災から早くも5年が経過いたしました。改めて震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々の「復興」が進展しますようお祈り申し上げます。

この「あすへ向けての軌跡」も5冊目となり、教育復興支援センターとして発行するのは最後となりそうです。東日本大震災から5年が経過し、いわゆる「集中復興期間」を終え、4月からは5年間の「復興・創生期間」となります。これを機に、復興に向けた在り方が大きく変わり、宮城教育大学、教育復興支援センターも、新たに未来に向けたセンターとして転換が図られることになっています。

本センターは、宮城県内の学校教育の復旧・復興、児童生徒の確かな学力の定着・向上、現職教員の各種支援等をめざして平成23年6月に開設されました。目標の達成に向けて支援実践部門と研究開発部門とが連携協力して、地域への貢献、新たな教育の創造、復興に向けたグローバルな人材の育成に努めてきました。

本年度、支援実践部門においては、学習支援を中心とする被災地からのボランティア学生の派遣要請に、県内外の他大学からの支援を受けて、概ね応えることができました。また、4年目を迎えたボランティア協力員を中心とする学生組織にはいくつかの課題もありますが、ボランティア活動を通じて将来教師をめざす本学学生の資質・能力の育成が図られました。また、受け入れ先の各市町村教育委員会、学校からの評価も高く、派遣要請も多いことから、今後とも学生ボランティア活動の充実を推進していきたいと考えています。

研究開発部門にあっては、震災復興・防災に関する調査・研究、他大学との共同研究に基づき、その成果を海外にまで発信しています。また、新たな教育の創造に向けて、教育大学防災ネットワーク(NUE)の構築、学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援を実施し、教育復興の担い手の育成にも取り組んできました。

また、被災した市町村教育委員会や校長会と連携して、震災時の学校の記録や次代に向けたメッセージ等の収集に取り組んできました。今年度は、南三陸町教育委員会による「未来を拓く」教育復興の歩み、仙台市立小学校校長会による教育復興実践事例集(第4集)、仙台市立中学校校長会による故郷復興プロジェクト視聴DVD(第2巻、第3巻)が発行されます。すでに刊行された他の記録集とともに、今後の防災・減災教育の推進にあたって活用されるものと確信します。

この1年を振り返ると、27年3月、仙台市で開催された第3回国連防災世界会議への参画、28年10月開催の宮城教育大学創立50周年式典が思い起こされます。

前者については、本文中で紹介されておりますので詳細は避けませんが、教育復興支援センター、ボランティア協力員がそれぞれの活動に意欲的に取り組み、内外から高い評価を得たことのみ報告しておきます。

後者のシンポジウムに参加して思ったことを紹介します。各年代を代表する本学の同窓生、現役学生がそれぞれの学生時代の思い出、現在の活動について発言するとともに、宮城教育大学の方向性や未来の学生への期待などが提言されました。50年の年齢差もあり、現在の置かれた環境、立場の違いに基づく提言は多岐多様であり、興味深く話を伺いました。

「キーワードは未来」。シンポジウムにおけるさまざまな発言、提言を伺い、ふと思いついたのがこのフレーズです。

学校は、次代を担う子どもたちの育成のためのものであり、大学も例外ではありません。教育大学はいわば「入れ子(入籠)」のように、未来を担う児童生徒を育てるための教師をめざす学生を育成する、という二重構造になっています。大学におけるすべての活動、日々の授業、サークル活動、教育実習も形こそ異なりますが、望ましい人間、教師の育成であり、めざすところは変わりません。

そして、それは本センターの活動の中核を占める学習支援等のボランティア活動もまた同様です。ボランティア活動を実際に経験し、その中で悩み苦しんだこと、教えられたことや考えたことは、日常の学生生活では得られない貴重な体験だと思えます。本学の学生には、まずはボランティア活動に参加してみることを推奨します。被災地では、児童生徒が大学生と接する機会は少なく、学習会等で年齢の近い大学生との出会いが楽しみである子どもたちが大勢います。子どもたちの未来のために、自分自身の未来のために、宮城教育大学生として意欲的に参加するよう願ってやみません。

思えば、この「軌跡」の正式名称は、「あすへ向けての軌跡——踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために」であります。前掲のシンポジウム参加者の提言も、本センターの5年間の取組も、この目標実現のための活動であったと改めて考えさせられました。そして、新しく生まれ変わるセンターのコンセプトも、方向性は変わらず、むしろ拡充が求められるものと考えています。

本「軌跡」は教育復興支援センターの歩みをまとめたものであり、5年間の活動を振り返っています。別に刊行する研究「紀要」や本センターが編集に携わった刊行物とともに、参照していただければ幸いです。

震災からの一刻も早い復興を祈念し、発刊にあたってのごあいさつといたします。

教育復興支援センター長
中井 滋

東日本大震災

踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

震災から5年を経て

平成28年3月31日発行

編集・発行 / 国立大学法人
宮城教育大学 教育復興支援センター

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

電話 022-214-3296 022-214-3667

E-mail fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp

制作・印刷 / 株式会社ホクトコーポレーション

東日本大震災

踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために
あすへ向けての軌跡
～震災から5年を経て～

発行



国立大学法人
宮城教育大学

教育復興支援センター

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

TEL 022-214-3296

E-Mail : fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp

ご支援いただきました皆様
協働いただきました皆様
ありがとうございました
地域とともに 子どもたちの
笑顔のために
これからが 本当の復興です



このフレイクは「水なし印刷」
により印刷しております。



環境にやさしい「植物油インク」
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。